
悪魔がやってきた！

クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔がやってきた！

【Nコード】

N6562D

【作者名】

クロフォード

【あらすじ】

ある日、平凡な毎日を送っていた私のところに、1人の女の子が突然私の部屋に突っ込んできた！なんと、その娘は、とんでもない悪魔の子だった！『悪魔がやってきた！』26』から、文章が若干変わります。

小説紹介（前書き）

そして、この小説は、良いことor悪いことがあったときに、気軽に見てもらい、笑って欲しい

さらに、その人を幸せにするために生まれた小説です。

是非、お時間をもらえたえら、本編も見てください。

小説紹介

どうも、クロフォードです！

今回は、ある女の人が、人間界に迷い込んだ悪魔の子と出会い、その悪魔の子の親が迎えに来るまで、面倒を見るという話です！
えー、それでは！主人公の紹介いきまーす！

主人公：市村優子（いちむら ゆうこ26） 入社4年目の会社員

生年月日：1982年 7月2日 かに座 B型

出身：神奈川県横浜市

家：会社が千葉なので、その近くのマンションで、1人暮らし
性格：男勝り、強気、アホ（天然）

得意な事：スポーツ全般（特に剣道）、先読み、尋問、etc...
嫌いな事：お料理

好きな物：母のお料理（特にデザート）、みっちー（3歳のネコ）
嫌いな物：自分で作ったお料理、トマト、あすばら、チーズ、etc...
tc...

学 暦：長谷はせ小学校→長谷中学校→横浜高校→東海大学→
現在に至る。

という感じの主人公です。

本文は、彼女の目線で書いていきます。

では、そろそろ始めましょう！

小説紹介（後書き）

多少、3話ぐらい連続のお話になるかもしれませんが、大体は1話完結型なんで、読みたい時に読めて、終わりたいときに終われる、そんな小説です。

特に楽しくなるのは、後半ですね。20話以降ぐらいです。

悪魔がやってきたー！ー！

く魔界く

悪魔の子A：「わーい、勝ったー！じゃあ、鬼はジュール君ね」

悪魔の子B：「20秒だよー」

ジュール：「わかったー！・・・いーち・・・」

ヴァンパイアの子：「逃げるー！」

悪魔の子A：「どこにしようかなー」

ヴァンパイアの子：「じゃあ、ぼくあっちに隠れる！」

悪魔の子A：「じゃあ、私こっちー！」

タッタッタ！

悪魔の子A：「あれれ？ここってもしかして、パパの言ってた所かな？」

パパ：『そこにある穴に絶対に入っちゃいけないよ！約束できるね？』

悪魔の子A：『はい！』

悪魔の子A：「えへへ　ちよつとぐらいならいいよね！」

ひゅ~~~~~

悪魔の子A：「ふわあー！！」

く日本く

ジリリリリリリ！

「か・・・う・・・うるさ・・・い！」

リリリリリリリ！

「う・・・ん・・・止ま・・・りなさ・・・いい。」

リリリリリリリリ・・・

「止とどまれって言うてんだろー！ー！」

ベキ！

ブン！

ひゅーるるるる・・・

ガッシャーン！

「わははは！目覚まし時計どときが私に敵うと思うなよ！ははは・・・」

はあ・・・時計壊したの何個目だよ・・・私・・・。

たしかこれで・・・十・・・何個だっけ・・・。

はあ・・・さすがに目覚まし時計を耳に一晩中付けるのは失敗だったか・・・。

だってこいつ音小さいんだもん！

近く来ると音大きくするんだから、もうホント困るね、こいつら、目覚まし時計一族。

それでは、私が壊した目覚まし時計達の一生を教えてしんぜよう。

- 1 個目：ねぼけて右ストレートをかましてしまった。
- 2 個目：と同じ。
- 3 個目：エルボーをくらわして、ぶっ壊した。
- 4 個目：一人暮らし始めてから、初めての寿命？（2 年間）
- 5 個目：親友の家に泊まりに行って、右ストレートで壊してしまっ
た。

・ ・ ・

・・・てな感じで、今に至ります。
さあて、次はどこに置こうか。

それか、時計を固定して、イヤホンを付けてねるか・・・。
いろいろ考えているうちに、8 時を回った。

「・・・やばい！遅刻してしまう！」

これでも一応 4 年間皆勤賞をとりつづけているのだ！

「こんなところで、終わってたま・・・」

「きゃあああああああ！！」

「ぬあああああああ！！」

ガッシャーン！！

こゝんな朝っぱらから、なんじゃあああ！！

「イテテ・・・ん？尻尾？」

グイッと持ち上げてみた。

「っ重・・・！」

ブラウンブラウン

へ・・・？何この娘？

え？何？最近の若いこの間では、尻尾を付けて人の家に飛び込むのが流行ってるのかな？

「・・・これ、アクセサリーだよね・・・。」

グイッ！

「いたああい！」

わ！起きた！

「君い、どっからきたの？」

「ふえ？」

「・・・。」

「・・・？」

「いや、だからあ、どっからきたの？」

「おねえちゃん、誰？」

こっちが聞きてえよ！どっからきたか聞いてんだよあ！

「だから、どこから・・・。」

「私ね、パパとの約束やぶっちゃってね、こんなところきちゃったの・・・。」

パパとの約束？そりゃ、こんなあぶねえ遊び、やらせる親父いるかよ。

「ん？」

羽？何この娘オ！？天使にでもなつたつもりかね！？

「おねえちゃん、面白い服だね！」

お前だよおお！お前こそなんだよその格好！

真つ黒の・・・なんて言ったらいいからん服と、ミニスカートと、ブーツ(?)と、尻っぱと羽のアクセサリ！。

「そういえば、君は何で、尻尾を付けているの？羽も・・・。」

「あれ？おねえちゃんには何で付いてないの？」

何言い出してんだ？このガキ？

「あれ？ここつてもしかして、ちきゅうつてところ？」

『ちきゅうつてところ？』じゃねえよ！じゃ、お前はどっから来たんだよ！

なめとんのか！？このガキ！？

「何言つてるの？悪いけど、おねえさん遊んでる暇ないん・・・。」

はっ！

8時15分・・・！！

「ぬああああ！遅刻するー！！」

「おねえちゃんって、おもしろいね」

「はいはい、じゃあ早く帰ってね！」

「ええ、でも、帰り方わからない！」

「ええ！そんなこといわれても……。」

仕方ない、警察に行く時間ないし……。

「わかった、じゃあ、ここで、静かにまってなさいよ！勝手にドア開けちゃだめだよ！」

「どあ？うん、わかった。」

ほんとに大丈夫かな……。

もしかして、少女を監禁したとかで告訴されないかな……。
おっと！心配している場合じゃ……なくないけど。

とりあえず、行こう。なぜなら、遅刻するから。

「静かに待ってなよ！」

「はい」

ドアを閉め、鍵を閉め、疾風の如く走り出す。

「遅刻だけはあゝ！！」

ダダダダダダダ！

もう少し……！！ああ！時間が！

くそのころ市村のマンションく

「あゝ、なにこれ、おもしろい！」

ガタガタ！

ガッシャーン

「わー、これなんだろうー」

ドサドサ！

ゴトゴト！

くそのころの市村く

「いや、ですから女の子が窓から・・・」

「言い訳無用！だいたい、君はもっとまじな嘘をつけないのかね！？」

「いや・・・本当ですって・・・」

「黙りなさい！自分の失敗なんだから、少しは反省しなさい！」
「う・・・はい・・・」

あのがき、おぼえてろ・・・！

「聞いているのか!!」

「はい!!」

悪魔がやってきた！〜2〜

「はぁ〜・・・」

あのガキ、私の部屋でなんかやらかしてないだろうな・・・。

く市村のイメージく

ガキ：『わー！なにこれー！？おもしろい絵！』

ああ！それは私が大切にしているキング・カズのサインー！！絵じゃない！

ガキ：『なんだろこれ？』

それは、私の下着だあー！！なにさつとんじゃあああああ！！

ガキ：『あつ！さつきの踏んじやつた！』

ざけんじゃねええ！私のカズがああああああ！！

「・・・い・・・い！・・・おい！市村！」

「はっ！あ、はい！」

「ちゃんと仕事しろよ・・・？」

「すす、すいません！」

「でなきゃ、給料下げるぞ・・・？」

「ひい！それだけは！それだけは嫌です！」

「しっかり仕事してくれよ・・・」

ああ、あいつのことが気になって、仕事も手につかない・・・。

「ゆゝこさゝん！ここが、どうしてもわかんないんですけど・・・」

「ああこれ、ちよつと長くなるよ？」

「おねがいします」

「ありがとうございますあ！では！」

「あいよ」

ふつ、先輩つて何故か後輩に好かれるんだよな・・・。

「優子さん、大変ですね」

「服部・・・。お前は言いよなあ、木村のお気に入りで・・・」

「そんなことないですよ！僕も最初はそこまで・・・」

「最初は・・・か。私と君は同期ではなかったのかね？いつから先輩になったんですか？」

「あ、いや、そんな・・・優子さんもそのうちに・・・」

「おーい、その二人。仕事しないなら帰ってもらってもいいぞー！」

「す、すいません！」

まったく。

あゝあ、この仕事場に、私好みの男現れないかな。

仲の良い女友達ならいるのにな・・・。

服部も、もう少し男前になったらなあ・・・。

私の周りの人といえば・・・

上司：木村拓哉^{きむらひたくや}。この顔じゃ、本物のキムタクがかわいそうだよ・・・。

で、言いたくなるような顔。性格悪い。

同期1：服部龍一。はつとり りゅういち同期なのに敬語使ってくる男。おもしろいし、やさしいけど、時々アホになる。

同期2：瑠璃。るり瑠璃。面白い名前の天然。性格も面白い。

昔、高校の剣道の関東大会で、決勝で対戦した相手。これを知ったのは最近である。

（勝ったのは、もちろん私）

同期3：野田桃子。のだ もも子慶応出身のお堅いやつ。上司も頭が上がらないくらい、

頭が良い。（でも結構良いやつ）

後輩1：福浦真央。ふくつ まおかわいい、良いやつだあ。

だけど、難しいことは他人任せ。そろそろ自立っていうものを教えてあげないと……。

後輩2：国分剛。こくぶん たけし気の弱い男。なんていうか……こう……オーラがないね！うん。オーラが！もっとシャキツとして、胸張って！

まあ、こんなもんかな。まだいるけど……他の人普通にやさしいんだもん。

「市村、この書類明日までに書いとけよ」

「ええ！無茶言わんでください！」

「やっぱり無理か……じゃあ、野田に任せるか……」

「えっ、やっぱりって……」

「せっかくチャンスを与えてやったのになあ。残念だなあ」

「えーちよっ、ま、待って……」

スタスタスタ・・・

ああ、行ってしまったあ……。せつかくのチャンスがああ……。

「野田君、これ明日までに書き上げてくれないかな？」

「ああ・・・かまわないですよ」

「ああ、そうか！いやゝ助かるよゝ。いつも、悪いねえ」

「いえいえ、そんな・・・」

スタスタスタ・・・

あ、こつち来た。

「まあ、ガンバっていきましょう」

「はい・・・」

ゝその日の夜ゝ

「やべゝ！こんな遅れるとは思わなかった！早く帰らないと！」

ん？待てよ。何か忘れているような・・・。

ゝ昨日ゝ

瑠璃：『ゆーこ、明日仕事終わったら、食べに行かない？』

私：『おー！いいね！でも私残業するかもだから、そのときは、オフィスで待っててね』

瑠璃：『あいよ！分かった！』

・・・。

あああ！そういえば思い出したああ！

しかも、帰るとき、瑠璃に呼ばれたかもおおお！！

け・・・携帯・・・！

あ、メール来てる！

『ちよつとどうしたの？行かないの？』

やべ、ちよつとおこってるかな！？

『ごめん、今日、大切な用事ができたから、無理。スマン。』つと・・・。

ごめんよ・・・瑠璃・・・。

でも、私、あいつほつたらかしにしたら、捕まっちゃうかも・・・。

つ・・・着いた！

「6階までダーーーーッシュ！」

ズドドドドドドド！！

私は、少し心配になった。

たぶんあの娘、今日なんも食べてないから。

早く帰ってなんか、作ってあげないと・・・。

「つて、違う違う違う！ケーサツ！そう、ケーサツに行くの！」

部屋の前に来た。

「ええつと、カギ、カギは・・・」

そうしていると、ガチャッと音がして、私の部屋のドアが開いた。

「あつ。おねえちゃんだ!」

そこには、目をウルウルさせた、あの娘がいた。

「こ・・・コラ!勝手に開けるなって言っただで・・・」
「わ〜ん!」

え!ちょっと、ここで泣かないで!

「あゝゴメンゴメン!もう、じゃあ、中入ろ!」
「ヴえええええん!」

うつるせーな、こいつ。

「ぐすん・・・。」

やっと泣き止んだか・・・。

「お腹空いた?なんか、食べる?」

廊下を歩きながら尋ねると、コクツとうなずいた。
仕方ない、これ食わしたら、ケーサツに行こう。
そして、居間のドアを開けた。

しかし、私の目に飛び込んできたのは、いつもの風景じゃない、汚い部屋だった。

「な・・・な・・・」

なんじゃこりやあああああああああああああ！
私のものがあるあ！あらされとるうううう！！

「えへへ、地球って面白いのいっぱいだね！」

「あ・・・悪魔め・・・！」

「え、そうだけど・・・」

・・・はあ、一発殴りたいよ、このガキ。

「仕方ない、ケーサツに行くか。」

「ケーサツ・・・？」

「君、お家はどこかな？」

「お家はねえ、地球にないんだって、パパ言ってた」

「は？」

どんな親父か見てみたいね、ホント。

「あれ？何、あんた、よく見たら、泥だらけじゃない」

「うん、ジュール君たちとかくれんぼしてたから・・・」

ジュール君！？なに？ハーフなの？それとも日系外国人！？

「仕方ないなあ、じゃあ、こうしよう」

1：風呂に入る。

2：部屋の掃除。

3：飯。

4：明日、警察に行く。

「はい、じゃ、お風呂入ろう!」

「わーい!おつふる」

「そういえば、まだ、名前聞いてなかったね。あつ、私は市村優子。優子さんって呼んでね。

あなたは?」

「私はねえ、ホスマリン」エルル」リナレスって言うの!」

ホス・・・エル?・・・リナ?え・・・。あなたは、何人ですか?

「えつと、じゃあ、リナレスだから、リナちゃんでもいい?」

「リナ?うん!いいよ!えへへ!」

〔浴室〕

わたしは、リナちゃんの服を脱がしていると、あることに気づいた。

「あれ?これ、本当に生えてる!?」

羽、尻尾・・・。

「ゆーこさん、悪魔は、皆生えてますよ」

「えっ!ちよつと、ウソ!え、本当なの!?」

「やつと、信じてくれた」

えええええ!うつそー!ちよつと待ってー!

「悪魔・・・だっけ?」

「うん」

きやあああ！どうせなら、天使がよかったあああ！

つつこむところちがうだろ！と言いたいのは、分かりますが、
そういう人なので許してやって下さい。

「悪魔？じゃあ、リナちゃんは、なにか、悪いことするの？（もう
したけど。）」

「ううん、私まだ、大人じゃないから、おっきい事できないよ」

よかった・・・じゃあ、仕方ない・・・この娘の面倒をしばらくみ
るか・・・。

「っていうか、リナちゃん、髪サラサラだし、肌つるつるだね・・・」

「

うらやましいなあ・・・。

何使ってんだろ・・・。

風呂から上がって、部屋を掃除した後、冷凍庫にあった冷凍食品を
食べた。

「・・・ねえ、リナちゃん？」

「なーに？」

「リナちゃんのいた世界ってどんなだった？」

「うーんとねえ、地球より、緑が多いよ！」

「へえ、私の想像とはぜんぜん違うなあ・・・」

そのあと、私は、リナちゃんに、いろいろ質問した。

ここで、リナちゃんの紹介をしよう。

名前：ホスマリン＝エルル＝リナレス。7歳。悪魔の子ども。
生年月日：不明。

出身：魔界、エルル区。

性格：ちよつと、やんちゃかな。

得意なこと：悪魔のくせに、人を幸せにするのが得意らしい。

好きな物：ママとパパ

嫌いな物：怒ったパパ

好きな事：お風呂に入ること。遊ぶこと。

嫌いな事：たくさん。

こんな感じ。

そうして、私が、話していると。

ピンポン！

「おーい！ゆうこー！」

わっ！この声は、瑠璃！

「リナちゃん！ここに隠れてて！」

「え？なんで？」

「いいから！」

ガチャ！

「はい。あつ、瑠璃ごめんねー！」

「どうしたの？もう用事済んだの？じゃあ、あがらしてもらおうよ」

「あっ！ちよっと待って！」

「どうしたの？あっ、まさか、彼氏でもいるの！？」

「え！？いや、違うけど・・・」

「じゃあ、いいじゃん！ほら、これ持ってきたから、一杯やらない？ほら、」

昔から、急がば回れて、言うじゃん？」

「瑠璃・・・それ、使い方、間違ってる？」

「はいはい、わかったわかった！じゃあ早く部屋行こうよ！」

「う・・・うん。」

ああ、やばい！どうかバレませんように！神様！

悪魔がやってきた！〜

「・・・でさ、あいつたらさ、ホントにさ・・・」

また始まった。

これは、瑠璃の愚痴を聞くという拷問。

最低2時間は聞かされる。

話はいつつも決まってる。

彼氏のこと&政治経済について。

この子、本当にヲタクかってくらい政治経済に詳しいんだよ。

まったくあれだよ、今も日本の政治の事愚痴ってんだけど、

いつも私に言っても全然わかんないのよ！

ほんと、あんたが言ってる”あいつ”って人に直接言ってほしいよ、私あ。

「それでね、聞いてよ！この前彼氏がねえ・・・」

彼氏の話開始！

やった！この話なら、私もなんとか・・・。

「県会議員になったの〜！ね、すごいでしょう！？」

「うん．．うん！？」

それってすごいのか？

うん．．わからん。

「で、その彼氏と 山×夫が、この前、すごい討論してね．．．」
うわ。

政治続いた。

「．．．で、内容が．．．」

（30分後）

「ね、すごいでしょう！？」

「うん．．すごい．．．」

疲れた。

そつえば、リナは大丈夫かな！？

「ちよつとお、あたしの話聞いてるう！？」

「え、あーいや、聞いてる聞いてる。って、あんた酔ってる！？」

「ふええ〜い。ヒック！ 酔ってなんか・・・ヒック！ うい〜。
ない・・・」

「そう・・・！？」

「あたしい、いっつもねえ、焼酎1本飲んでるから・・・ヒック！
ダ〜イジヨ〜ブ！」

何故いつも焼酎1本飲み干す！？

「だから・・・ヒック！ あたし、お酒強いのよ・・・」

絶対違うよ。うん。あんた絶対お酒弱いよ。

「ほんと、あたし、ダ〜イジヨ〜・・・うつ！」

「まってえ！まってえ！ここで吐かない」

「うおええええええええええ！！」

「でええええええええええ！！」

ふざけんなあああああ！！瑠璃iiiiiiii！！

「お前、トイレ行け！トイレ！」

「どい・・・。」

「そこ！そこ出て左！」

「左ってどっ」

「ああもう！こつちだ！左は！」

「かたじけない・・・。」

もう！家で吐くなよ……！処分しなければ……。

「うおええええええええええ！ おええええええええええ！」

あいつ本当に吐いてんのか！？

吐くときって、あんなに声出たっけ！？

「なんじゃこりゃあああああ！」

ゲだよ。お前のゲだ。

「うおええええええええええ！！」

またかよ。

「まてよ、リナは大丈夫か!？」

「リナ！」

クローゼットの扉をバーンって、開けたら、

「うわああああああああん!!」

「どわああああああああん!!」

「ゆゝこさゝん!怖かったあゝ!!」

「そうだよね。ごめんね!」

「わーーーーん!!」

「あつ!待って!大きい声出さないで!!」

「わああああん!」

「ちよつ、リナ!静かに・・・」

「わああああああん!」

静かにしろおおおお!!

「優子・・・。」

はっ!

瑠璃!!

「その娘・・・だ、だれ!?!」

「えっと!こ、この娘は、私の親戚の友達の友達のそのまた友達か

「ら預かった・・・」

「まさか・・・隠し子!?!」

「違う違う違う! ああ! なんて言おう!?!」

「・・・よし。」

「これしかない。」

「この娘は、悪魔の子よ!」

「優子・・・。」

「信じて!」

「あんたって、ほんと、ウソつくの下手ね。」

「これ見たら分かるよ。」

「え?」

「リナ!」

「なに?」

「ゴメン!」

私はリナに貸したダボダボの上着を脱がして、リナの背中を見せた。

「え！？なにこれ！？アクセサリー！？」

「違うよ。ほらこれ、本当に背中から生えてる。」

「うそ！？」

「尻尾も」

「うそお！？」

「こんな事に使ってごめんね、リナ」

「いいよ、男の人が見るわけじゃないし」

「本当なの！？」

「うん、だから言ってるじゃん」

「リナちゃん・・・？」

「なーに？」

そのまま数秒瑠璃は黙り

「カワイーーーーー！！！」

飛びついた。

「きゃー！なにこれー！人形見みたいー！てか、髪サラサラー！
！」

きやいきやい

　　30分後

「じゃ、ごめんね。おじゃましました〜!」

「瑠璃!このこと内緒だからね!約束だよ!」

「わかってるって〜!バイバイ!またね、リナちゃん!」

「ばいばい、またね〜」

満面の笑みで、手を振っているリナは、とても愛らしかった。

「じゃあね!優子!」

「また明日〜」

はあ、今日は疲れたよ。

「ね〜、眠いよ〜」

「ああ、ごめんまだ仕事あるから」

「じゃあ、歌、子守唄うたって!」

「え!子守唄!?!」

わからん!どつやって歌うの!?

そして・・・

「じゃあ、いきます・・・」

「いきますって・・・?優子さん?」

「えがおさく〜きみ〜と〜つ〜ながって〜たい〜」

「優子さんやめて」

「・・・」めん

「しっかり歌ってください!」

「よし、いくぞ!」

「いくぞって・・・!?」

「& a m p・・・」
「& a m p・・・」

「何語ですか!?」

「いや、わからない」

「もういいです」

「ごめん」

カタカタ・・・

「ふあゝあ・・・ねむ・・・」

リナは・・・ぐっすり眠ってる。

「私も寝よう・・・」

私もリナの隣で、眠った。

く魔界く

エルル王：「リナレスがない!？」

エルル王妃：「なんですって!？」

悪魔兵士：「は!例の穴から地球に行ったようです!」

エルル王：「よし!地球をくまなく探せ!」

悪魔兵士：「はは!」

エルル王：「リナレス・・・!」

く地球く

リナ：「パパ・・・ママ・・・」

悪魔がやってきた！〜4〜

・・・寒！

なんだこの寒さは！？

尋常じゃないぞ！？

一夜にして地球は氷河期か！？

「リナ・・・って、あれ？いない？」

「あ、優子さん起きましたか」

わあ、このガキ、この真冬の朝っぱらから窓全開にしてる。

「氷河期の原因は貴様が、リナ！」

「ええ！？私、何かいけないことしました！？」

はい、おもいつきりしてますよ、リナさん。

「あのねえ、冬なのに朝から窓全開なんてね、おかしいのよ？第一、風邪ひいてからじゃ遅いん」

「私、小鳥さん達と遊んでるんで、気にしないで寝ていていいですよー」

「いやね、気にする気にしないの問題じゃなくて」

「あー！もう一羽きたー！」

聞いてないよ、コイツ。

「あのねえ、リナ・・・はっ！」

「どうしたんですか？」

AM 8：07 だと！？

「やばいよりナちゃん・・・」

「なにがですか？」

「ごめんねリナ！今朝ごはん無し！」

「えええ〜！いやです〜！」

「じゃあ、そのパンとかお菓子とか食べて！」

このごろ寝坊するなあ・・・。

やっぱ、こんどは目覚まし時計をああして、こうして・・・。

じゃない！急がなきゃ！

2日連続遅刻はシャレになんないよ！優子！

AM 8：15 準備完了！

「優子さん早！ていうか、顔とか汚いですよ！」

「仕方ないだろ！休みの時に何とかするよ！」

「がんばってください・・・ね」

「いつてきます！」

ぬあああああああ！

こりゃ、完全に遅刻か！？

いや、この優子さんにできないことはないのだ！

フハハハハハハハハ！

って、笑ってる場合じゃない！

優子お得意の、先読み開始！

木村（上司）：『ふん、また遅刻か・・・』

瑠璃：『あゝあ、優子やつちやつたね』

服部：『マジありえないっすよ！優子さんバカっすね！』

桃子：『そりやないわ・・・』

みんな冷たいよ！

いやー！そんな目で見ないでー！

ていつか最後の2人がむかつく！

AM 8：28 到着！

あつぶなかつた〜！

「優子・・・」

「あ、瑠璃」

「ごめん！優子！」

「はい？」

「みんなにあのこと言っちゃった！ごめん！」

「あのことして・・・あのこと？」

「そう・・・リナちゃんのこと」

わきやああああああああああ！

何言っただよ瑠璃い〜！！

「や、でも、みんな真面目だからそんなこと信じるわけ・・・」

「それが・・・」

「優子さー！ーん！」

は・・・服部！？

ものすごい顔で来たああああああ！！

「優子さん！優子さん！ほ、本当なんですか！？」

「え、あー、いや・・・」

「そうかあ、やっぱり本当なのかあ・・・！」

え？え？

「よし！こんど優子さん家いていいですか！？」

「え、ちよつと待って！」

「わかってますって！桃子さんも瑠璃さんも一緒ですから！」

「いやそういうわけじゃなくて・・・」

「優子さん！私も！」

真央！お前もか！

ええい！朝っぱらからゴチャゴチャうるさい！散れ！

「リナは見せ物じゃないの！だから、だめ！」

「え？本当だったんですか？」

「・・・は？」

「いや、みんな瑠璃さんと優子さんがつるんで、僕達をだましてるのかと・・・」

ええええええ！？

「あの、それは・・・えつと・・・」

「ま、悪魔なんて信じてないから・・・」

そ、そりゃあ、ありがたい！

「でも一回見てみたいな・・・」

「無理」

「くつ、けちですね、優子さん・・・」

そう言っつて、服部たちは戻っていった。

嵐が去ったか・・・。

「瑠璃・・・あとでちよつと来い・・・」

「・・・はい」

夕方

「さ！終わった終わった！」

「優子！今日も行っていい？」

こいつ……ずうずうしいな……。

「だめ、今日は、リナに色々教えなければならんだ」

「ええ……でも……」

「ほら、あんた、今日ばらしたんだから」

「くう……」

そうして、今日は、瑠璃と一緒に帰った。

「ねえ……ところで、リナちゃんって7歳だっけ？」

「うん……なんで？」

「いや、なんか、すごい敬語使う7歳だなーって……」

「そいやあ、そうだ。なんでだろう？」

「じゃあ、これは、聞いたいてよ。ね、そしたらさ、明日教えて！」

ええ……コイツまったく反省の色見せてないよ……。

ま、いいか。それくらい。

「ま、いいよ別に」

「あ、明日、土曜じゃん。メールのほうがいいか」

「わかった、メールするね」

「優子さん、頼みましたよ！」

そして、瑠璃と別れた。

たぶんあいつ、今日も飲むだろうな・・・。

あ、家か・・・。

「たっだいま」

「あゝ優子さん！おかえりなさ〜い」

「おゝりナ〜！今日は何もしてないよね？」

「うん、静かに待ってた！」

「よしよし、じゃあ、明日は休みだから、明日一緒に遊ぼうか！」

「わーい！」

さてと、夕食だな。

・・・寒い！？

ここは、私の部屋だぞ！？

・・・まさか！

ヒュウ！窓全開！

ここは、朝から寒さの我慢大会でも開催していたのかい？

「リナ・・・窓は、開けたら必ず閉めようね」

「はゝい、わかりましたゝ」

そう言っつて、リナはすぐに窓を閉めに言った。

寒くないのかな？

たぶん、利口な子どもなんだけどな・・・。

「さ、夕食にしよう！」

コンビニで買った弁当を、2人で食べた。

「ねえ、リナちゃん。リナちゃんはなんで、そんなに言葉遣いが良いの？」

「うんとねえ・・・パパがね、魔界のエルル区の王だから、目上の人には敬語使いなさいって」

言っててね」

「そ、そう」

エリート家庭キター！ていうか父ちゃんキングっすか！？

「そういえば、難しい言葉も・・・」

「日・韓・中・英・仏語なら話せますよ」

わぁ、すごい！

「天才少女か・・・」

あ！そうだ！メールしなきゃ！

『リナは、もともと敬語を使ってたんだって』っと。

あいつに真実を教えるはならぬ。

～夜～

さて、明日は、色々教えてやるか。

ふふ、私の手作り料理を食べさせてやるか・・・。

優子お手製、ポイズンクッキング！

私の料理を食べたものは、そう言って病院送りになった。

悪魔ならこんぐらい耐えられるでしょう。

「さ、明日に備えて、眠よう」

「・・・何に備えて!？」

悪魔がやってきたー！ー5ー

「ん．．．あ、朝か．．．」

リナ．．．は、今日はちゃんと寝ている。

ああ、布団が暖かい．．．出たくないよ．．．。

「ふあ．．．」

リナ起きたー！

「優子さん．．．起きてー、朝よー。ほら、学校遅れるわよ」

そんなセリフどこで覚えた！？ねぼけてるのか！？

リナせんぱーい、私会社員です。学校じゃなくて、会社です。

ていつか、今日土曜です。この世界では休みの日です。

「おきてー！優子さん」

急に子どもぶつてもだめだぞ！

私は、ここから出ない！

「．．．．．」

あれ？

急に静かに・・・。

「今日は、良い天気ですねえ。ねえ、優子さん」

なんだ？

ん？

あつ！てめ、リナ！

窓、開けようとしてやがる！

「3 2 1」

疾風の如く私は、布団を飛び出し、リナの手首を押さえた。

「ハア、ハア」

「ふふふふ」

このガキ・・・悪知恵だけはすごく働くから困るよね。

「そうだったね・・・昨日約束したね」

「じゃあ、早く遊びましょう」

「まず飯だ、飯にしよう」

朝食は、トーストと、目玉焼き。

「さて、私の手料理か・・・作るの何年ぶりかな・・・」

まず、トースターにパンをいれて、加熱。

そして、目玉焼きだ。

「まず、十分油を熱して、フライパンに卵を入れる！」

よし、卵をわって・・・。

グッシャ！

あ・・・。

「ハハハ、気楽に行こう。」

グシャ！

グシャ！

グッシャア！

て・・・手強いぞ卵！

仕方ない・・・割ったのは、もったいないから・・・

オムレツに変更！

「えっと・・・ミキサーは・・・」

え？ミキサーで何をする気だった？
それは、この先を読めばわかるよ。

「ああ、あつたあつた」

さてと、じゃあ、これにさっきの卵を・・・。

当然殻ごとね。

だって、もったいないじゃん。

ほら、ゴミの量も減るし・・・。

そして料理の味もヘルシー

なんちゃって。てへ。

「じゃ、ガアアアアアつと混ぜようかな」

ガアアアアア！

ウィィ・・・ン

「よしできたー！」

じゃ、これをジャーってフライパンに入れて・・・。

ジャー！

ジュウウウウ！

さて、このままふたをして、待つか・・・。

「リナ、もうすぐできるからね」

「うん！わかった！」

ていうか、リナ、少しずつ敬語使わなくなってるし・・・。

あれ？

コゲくさい・・・？

あ・・・。

「あ！」

「え！？」

キッチン直行！

予想通り！

パン焦げてる！

「ああ！どうしよう！？」

オムレツが黒い物体に！！

あああああああ！

予想通りだ

「はい、できましたー」

「わーい・・・うつ！ひどい・・・」

「でしょ?」

「でしょ?じゃないですよ・・・なんですかこの黒い物体は!?」

「パン・・・」

「パン!?」

「と、卵・・・」

「卵・・・」

「ふう、じゃ、食べ」

「ません」

「・・・よね」

その後、冷蔵庫にあった物を食べた私たちであった。

「よし、じゃあ今日の予定」

「はい」

「まず、私は買い物に行く。

その後遊ぶ。」

「はい」

「で、リナちゃんは、外に行くときは、尻尾しまつてね」

「はい」

「じゃ、買い物行つて来るから」

「私が行きます!」

「え!？」

うーん、そうだな、そういう経験をさせるのもいいか。

なんて言わないよ。

だって、事件とか起こしたら、私が責任取んなきゃいけないじゃない。

「だめ！あんたは家で」

って、いない！？

どこいった！？

はっ！

テーブルの上に置いてあった財布がない！

「いつてきまゝす」

「まって！」

「」

「財布の中に買うもの書いてあるからー！」

注：再度言いますが、突っ込むところ違うだろと思ってると思いますが、

そういう人なので。

ふう・・・ま、何とかなるだろ、あの子賢いから。

まるで、初めてのおつかいみたいだな・・・。

悪魔がやってきた！〜6〜

「大丈夫、大丈夫、あの子はきつと無事に帰ってくる・・・」

おつかいなんて頼んでよかったのかな・・・？

ていうか、頼んでないよね・・・。

〜そのころのリナ〜

「あ！おもしろい！なんですか？これ？」

「お！お嬢ちゃんおつかいかい？」

「はい！そうです！」

「えらいね〜！おつ、じゃあ、これ持ってきた！」

「いいんですか？」

「おお！いいよ！」

「ところで、なんて言っんですか？これ」

「わたあめだよ！おいしいぜ！」

「ありがとうございます！じゃ」

「しかし最近の子はわたあめも食わないのか・・・」

「優子」

「そつえば、魔界と現代ではいろいろ異なってるんだな・・・。」

「あいつ、おもしろいからって、へんなもの買わないかな・・・。」

「リナ」

「これください!」

「1200円です」

「せんにひゃくえん?」

「お嬢ちゃん、お母さんかお父さんはいるかな?」

「パパとママは今いないよ」

「あら、財布持ってるじゃない!」

「え?これですか?」

「そう、そこからお金出して」

「どれですか」

「それを1枚とって、それを2枚ね!」

「はい」

「はいどうも、ありがとうございました」

「えへへ、おもしろいな」

「昼」

「ただいま」

「リナ! どう? 買った?」

「はい! いろいろ!」

「いろいろ・・・?」

嫌な予感が・・・

「うつ・・・!」

的中

「ちゃんと買ってきましたー」

「ちゃんとって・・・」

溶けたベトベトしたものと、アジとトマトと、メロン・・・etc.

「わ・・・私の財布が・・・か、空っぽ・・・」

そのとき、財布から1枚の紙が落ちてきた。

『買ってくるもの』と書かれた紙。

「リナア、ここに書いてあるでしょ？」

「えへへ」

「えへへじゃない」

「……ごめんなさい」

初めてのおつかい終了。

「もう、お昼と夜はどうすんのさ」

「……」

「お金ないから、出前もとれないし……」

「……うええ〜ん！」

な、泣いちゃった!？

わわ、どうしよう。

私はどうすれば……。

「リナ、泣かないで！」

「ぐすん、私のせいで、お昼が・・・」

仕方ない、瑠璃を呼ぼう・・・あいつ料理得意だから・・・。

〽40分後〽

「おじゃまします」

「瑠璃、ありがとう」

「わかったから、ほら、今からこれでなんか作ってあげるから」

「ありがとう！材料も買わしちゃってゴメンね」

「そのかわり」

「え！？」

「今日泊まってくよ！」

何をスッパリ言ってるかこの娘。

まあ、世話になるし・・・いいか。

「別にいいけど・・・」

「じゃ、上がらしてもらっよ」

「あ！この前のおねえちゃん！」

「リナちゃん！」

ああ、本当に小さい子が好きなんだね・・・。

「瑠璃おねえちゃんでもいいよー！」

「瑠璃おねえちゃん、今日はなににきたんですか」

「あほな優子さんに代わって、料理作りに来たのよ」

「瑠璃・・・」

「すみません・・・」

それから、瑠璃はキッチンに行き、料理を作り始めた。

「ふわー！良いにおい！」

ほんと、良い匂いだ！

「はい、できまーした」

「・・・！-！」

啞然としたリナ。

そして、よだれを垂らす私。

「どう？すごい？」

「すごいすぎ・・・」

「食べていい！？」

「よし、じゃあ、座って食べよう」

『いただきます！』

「おっ、おいしい！」

「そう？」

「おいしー！」

「ふふ、うれしいな・・・」

「すごいな～瑠璃は・・・」

瑠璃の作った料理は、とてもおいしかった。

「ところで、その袋の中・・・何？」

「
・
・
・
聞かないで
」

悪魔がやってきた！〜フ〜

「ところで、その袋の中・・・何？」

笑いながら瑠璃が聞いてきた。

うぜえコイツ。

だってこの質問

「10回目だぞ、何回言えば分かるのかな？」

「あはは、ごめんごめん！で、その袋の中何
」

「痛い・・・」

「しつこい！」

「優子さん、遊ぼうよ」

そうだった、約束したんだった。

約束は破っちゃいかな。

「よし、じゃあ何して遊ぶかな・・・」

「じゃあさ、遊びで剣道やらせない？」

瑠璃！？

いや、まてまてまてまて。

え？

剣道？

遊びで剣道？

ム力。

「いたたた・・・」

「剣道は遊びなどではナイ！！」

「わかってるよ、もう、容赦ないなあ」

「けんどうつて何？」

ほら興味持っちゃったじゃん。

「だいたい、竹刀がないじゃん」

「あるよ、玄関に」

「え!？」

いつのまに……。

「3本」

計画済みだな……おい。

「瑠璃……あんたそれ目当てで来たの？」

「いや違う違う!本当に泊まりに来たんだった!」

「そお……?」

「けんどうやりたーーーーい!!」

あーあ、ついに駄々こね始めちゃったじゃん。

「仕方ない……」

「えへへ」

「で、「コ」の名前が……。」

さすがに遊びでも、竹刀の部分部分の名前は覚えて欲しい。

「えへへ、よし!」

「こらこら!まだダメだよ!そんな持ち方じゃ……」

「えー・・・剣道って難しいんですね」

「ねえ、遊びなんだからいいじゃんさー、別に」

ムカ。

「ほう・・・」

「あーもう！わかったから！あんたの剣道への情熱はよくわかったって！」

「よし！OK！なんだ、意外と良い構えじゃん！」

「よし！じゃあ、あたしが相手だ！」

「よし、リナ！瑠璃なら楽勝だぞ！」

「ううう・・・うるさい！あれからトラウマになりかけたんだから、思い出させないでよ！」

「はっはっは！じゃあ、抜き胴で1本」

「ううう・・・」

あ、泣きそう。

もうやめてやるか。

なんてね。

私、尋問大好きだから。

「いや、それにしても、あの”めえっくん!!”の声にはセンスを感じたね」

「うえええっくん!」

「あー!優子さん、瑠璃おねえちゃん泣かしたー!」

わははははは。

「ごめんってば」

「ふんっ」

怒らしちゃった。

ま、だいたい予測できていたけど・・・。

「許して!ね?瑠璃ねえさっくん!」

「・・・こんど言ったら知らないからね・・・」

「わかった!もう言わない!」

「早くやろっよー!剣道!」

瑠璃は笑って、リナは真剣な顔で並んだ。

「よし、礼！」

『おねがいします』

ザッ！っとリナが1歩下がった。

お？なんだ、リナすごいさまになってんじゃん。

これじゃあ、瑠璃は本当にやられちゃうかも……。

ま、瑠璃のことだから、もうきずいているかな。

瑠璃の洞察力はハンパじゃないからね。

「………」

す……すごい集中力！

その次の瞬間！

リナの竹刀が振りあがった！

瑠璃もかさず受身の体勢を取った！

「えい！」

バシイイ！！

ウイイイイン・・・。

はぁ・・・。

剣道なんてやらせなきゃよかった・・・。

あのとき、何があったかというと・・・。

第3者に判りやすく説明。

リナ：「えい！」

バシイイ！

天井から部屋の照明落下。

2人とも私が外に行かせた。

で、いま掃除中。

「ふぁゝ・・・」

眠・・・。

そういえば、今日色々あったしなぁ・・・。

ちょっと、ソファで横になろう・・・。

「よっこい・・・」

せ・・・っと。

ああ・・・きもちええわあ・・・。

あ・・・なんだか天に昇れそう・・・。

「・・・さん・・・うござん・・・」

あれえ・・・何か聞こえる・・・。

天使がお迎えに来たのかなあ・・・。

「・・・うござん！」

声でかいよ・・・この天使。

「任せて」

・・・任せて！？

なんだ？もう1人いたのか！？

「優子お！夕ご飯できたぞー！！」

夕飯・・・？

「起きろー！！」

起きろ・・・？

『優子おねえさん！！』

この声は・・・！

「うつるさーい！！」

人がぐっすり寝てるのに！

「君達はデリカシーのかけらもないのか！？」

「だって、起きないんだもん」

「だもん」

「リピートじゃなくていいの！リナ！」

な・・・なんてことだ・・・。

「どお？私の料理？」

「どおって・・・」

私の大好きな、お好み焼きじゃーん！

「うわあああ！ありがとう！瑠璃最高！これ全部一人で作ったの！？」

「うん・・・つぶ！」

「どうしたの？」

「いやなんでも・・・ね、リナちゃん」

「はい」

なんだ、2人とも笑っちゃって・・・。

「よくやったぞ、リナちゃん」

「え？今なんか言った？」

「いや、何にも！さ、食べよ！」

お・・・おいしい！

「瑠璃サイコー！」

「あんたも最高・・・っう！」

まだ笑ってる・・・なんか変だな・・・。

おいしかった〜！

「ありがとね、瑠璃」

「どういたしまして」

「じゃあ、私、先お風呂入らしてもらうつよ」

「あ、私はいいよ。もう、お風呂入らしてもらったから」

「あ、そう」

「じゃあ、先寝てるね！」

いそいそと寝室に入っていった。

んー・・・。

変だぞ・・・。

「ま、いいか・・・」

お風呂に入ろう・・・。

「ふ〜んふ〜ん」

しかし、私は、浴室のドアを開け、鏡を見た瞬間、衝撃の映像を目の当たりにする。

はははは！

誰かの顔にたくさんラクガキがあるぞ！

だれだ？こいつ？

無様だなあ。

わはははは！

・・・・・・。

「瑠璃いい！！リナアア！！」

『キヤアアアアアア！！』

そして、今夜は、3人で徹夜で遊んだ。

悪魔がやってきた！〜8〜

（魔界・緊急会議室）

エルル王：「娘がいなくなってから、我がエルル区は、パニックに陥っている」

エルル王妃：「ああ、おねがいます各王位の方々！娘の捜索にご協力をお願いします！」

ジュール王：「うむ・・・こちらの兵達も、地球に送り込んだのが・・・」

グアリュープ王：「我がグアリュープ区も、全勢力を尽くし、捜索を開始しよう」

魔界王：「うむ、では魔界レスキュー“999（トリプルナイン）”を始動させよう」

エルル王：「ああ、ありがたい・・・。あの“999”まで始動させてくださるとは・・・」

魔界王：「いや、エルル王の愛娘だ。このくらいはたやすいことだ」

エルル王：「ああ、いや愛娘なんて・・・うれしい限りです」

クルセン王：「なんだか、外が騒がしいですね・・・」

一般兵：「各王位様！ご報告です！」

アガンナ王：「なんだネ！？君ハ！？」

ジュール王：「ああ、我がジュール区の兵です・・・無礼だ！さがりなさい！」

ジュール区兵：「ご無礼をお許してください！ですが、手がかりが見つけられました！」

エルル王：「なに！？」

ジュール王：「よし、話したまえ」

ジュール区兵：「はっ！ただいま入った情報です！

エルル王女は、地球の”アジア大陸”に落ちたようです！

具体的な場所はまだ特定していません！」

魔界王：「これで搜索範囲が大幅に減ったな」

ジュール王：「これは、早く見つけかりそうですね。よし、ご苦労。さがりなさい」

ジュール区兵：「はっ！」

魔界王：「では、各区全勢力を尽くし、搜索を開始せよ！これにて、緊急会議を終了する！」

エルル王妃：「アジア・・・」

エルル王：「どうした？」

エルル王妃：「いえ、アジアは、私も昔、一度だけ誤って入ってしまっただけ……」

エルル王：「ほう、初耳だな……」

エルル王妃：「ええ……そこで経験したのは、酷い差別でした」

エルル王：「差別……」

エルル王妃：「そう、差別です。興味本位で入った自分に後悔しました。」

場所は“日本”という所でした

エルル王：「日本は危険ということか……だが、もう数十年も前のことだろうか？」

エルル王妃：「危険には変わりはないのです！もし、リナレスが日本に入ってしまったら、

いたら、最悪の場合……」

エルル王：「うむ……まあ、あとは、勇士たちに任せよう……」

青年：「親父」

エルル王：「おお、ライアス！どうした？」

ライアス：「俺もリナを探してきてやるよ」

エルル王：「いや、だが・・・」

ライアス：「俺も暇だったからな、ちょっと暇つぶしついでに探してくるよ」

エルル王：「しかし、リナレスがいる所は、とても危険だぞ」

ライアス：「大丈夫だよ、あんたの息子だぜ？心配するなよ、親父」

エルル王：「・・・わかった。だが、気をつけろよ」

エルル王妃：「リナレスを頼んだよ」

ライアス：「ああ、リナはちゃんと俺が連れて帰ってくるよ」

エルル王：「魔界への帰り方はわかっているな？」

ライアス：「ああ、じゃあ行ってくる」

〔現代・日本〕

AM2:40 市村家

「うはははは！10連勝〜！」

「うっ、まだまだ〜！」

「いいかげん負けてあげなよ〜優子お」

私、優子さんは、VSリナ、TVゲーム10連勝中！

リナは操作が下手なのだ！

「もう一回ー！」

「ふふふ、何度やっても一緒ですよ、リナさん」

AM3:30

結果

「はー、はー！」

「優子さん、まだやりますか？」

「つ・・・強え！！」

形勢逆転された！！

リナVS優子、リナ99連勝中。

「もう・・・やめます」

「えー、いいところなのにー」

「そうだよねー、リナちゃん」

いつのまにか、瑠璃もリナの応援してるし。

「私、寝るわ」

「・・・」

「・・・」

「な・・・なんだその目は！」

「逃げるんですか・・・」

「にげ・・・逃げるわけじゃ・・・」

「よーわむし、よーわむし！」

よわ・・・

「よーわむし！」

リナまで・・・！

『よーわむし！よーわむし！』

くっ・・・！

私が拳を握ると同時に、リナが言った！

「あゝあ、 “ やっぱり ” 優子さん、やってみなければわからないこ

となのに、これからもずっと逃げていくんですね・・・」

そのとき、私は、あのときのことを思い出した。

『市村、この書類明日までに書いとけよ』

『ええ！無茶言わんでください！』

『“やっぱり”無理か・・・じゃあ、野田に任せるか・・・』

『えっ、“やっぱり”って・・・』

『せっかくチャンスを与えてやったのになあ。残念だなあ・・・』

そつだ、あの時も私は、“やってみなければわからないこと”に逃げてしまったんだった！

もう同じミスを繰り返さない！

「おーし！やったるーじゃねーか！」

「おー、男らしい！」

「男じゃない！」

結果

AM4:00

「もうゆるして・・・」

逃げるとかそれ以前に、完全なる“絶望”。

「ダメです」

「・・・」

あれ？

なんか、1名声がなかったけど・・・。

瑠璃さん？

寝てるよぉ・・・。

「優子さん・・・」

「ああ、ホント、もう無理・・・」

「じゃなくて・・・」

「ん？」

「私・・・地球こくに来てまだ、ちょっとだけど、私、地球こく大好き！」

リナ・・・！？

いきなりなにを言い出す！？

「だから、私もつと地球こゝにいたい！」

「リナ・・・」

「魔界にもいたいけど・・・私はもつとここにいたい！」

「・・・そつか、リナは間違つてきちゃったんだつたね」

「はい・・・だから、いつかは帰らなきゃ・・・」

「・・・急にしんみりしちゃったね！さ、続きやろう！」

「は・・・はい！」

それから、私たちは、夜明けまであそんだ。

日曜日 AM 10:00

「ふぁ・・・」

あ、寝てしまつたか・・・。

あれ、瑠璃は・・・？

メモが置いてある・・・。

『彼氏から、映画の誘い来たから、帰るね！あと、9：00ごろ、服部君から電話来たよ。』

私が出たら、相当びっくりしてたよ！えっと、起きたら電話してだつて。報告まつてるよ　P S ・ 2 人はもうそんな関係だったのか？』

帰った！？

ていうか服部！？

なんだろう・・・。

あいつに限って、悩みの相談なんかじゃないだろうし・・・。

・・・やべ。

なんか・・・、

私の胸のあたり、ドクンドクンしてるんだけど。

えー・・・。

く優子の妄想く

服部：『優子・・・俺と付き合わないかい？』

優子：『え？ウソ！？』

服部：『うそじゃないぜ・・・フフ、困った顔もかわいいて、優子
ないないないないない！！』

絶対ない！！

ていうか、キモイだろ！

はあ、絶対こんなことないのに・・・なに急にドキドキして、変な
妄想しちゃったんだろ。

服部が私のこと好き・・・なわけない！

・・・。

リナ・・・寝てるか。

「えっと・・・服部の電話番号は・・・」

やば！

すごいドキドキするよ！

男性を意識するのなんて、すごい久しぶりだから・・・。

私は、ドキドキしながら、番号を押した。

「
x - - x . . .」

『プルルルル！プルルルル！』

ああ〜！き・・・緊張するっ〜！！

悪魔がやってきた！〜9〜

『プルルル！ピッ！』

でた！

「もしもし・・・」

「あ、優子さんですか？」

「お、おお、そうだけど・・・なに？用って？」

「ああ、そうそう、あの・・・優子さん、今日暇ですか？」

「う・・・うん、まあね」

「悪魔の子がいるっていうのも本当ですか？」

ん？

これは、想像してたのと違うぞ・・・？

「ああ・・・うん」

「マジですか！？じゃあ、今日家で歓迎パーティー開きませんか？」

「か・・・歓迎！？って、リナのか？」

「リナ？ああ、悪魔の子のことですか。そうですね、決まってるじ

「やないですか」

「よかつた〜！」

「一気に力が抜けたよ〜。」

「歓迎パーティって、そんなことしなくていいよ」

「いや、もうみんな呼んでるし、いろいろ買ったし」

「行動速えな、おい。」

「な・・・！ちょ、ちょっと！勝手すぎるでしょー！」

「あ、そろそろ切りますね」

「てめ、勝手すぎるだろうって、ゴルァ。」

「まで！私の話を」

「じゃあ、4：00に家で待っています」

「ま・・・待てえ！」

『プツッ！・・・プー、プー、プー・・・』

「き・・・切りやがった。」

「行かないぞ！」

私は絶対に行かない！

「ねー、優子さん」

「どわああああ！」

「つきやああああ！」

「リナ！お・・起きてたの！？」

「びつくりした〜。優子さん、パーティーやるんですか？」

「え！？いや、ちが」

「あー、楽しみですね〜」

「え、ちよつ、リナ待ってええ！」

結局

「おじゃましまーす」

きちゃったよお〜。。。。

「わー！来た来た〜！」

「この子がリナちゃんですか！？」

わお、大歓迎会だなあ。

騒々しいメンバーだなあ。

服部・・・桃子・・・真央・・・国分君・・・ベス（服部の飼い犬）
・・・木村・・・。

木村！？

なぜ私たちの上司がいる！？

「な・・・なんで木村さんまで・・・！？」

「おや、居ちゃいけませんか？」

そう言った彼の目は、少し潤んで、淋しそうだった。

奥さんと別れたのかな・・・。

「いや、そんなつもりで言ったわけじゃ・・・ちょっとびっくりした
だけです！気にしないでください」

「そうか・・・」

おや？

一人だけ浮いている衣装をしているやつがいるぞ。

「よっ！優子」

朝川！！

なんでコイツを呼んだんだ！

違う部署だろーがあ！

あさかわ しんじ
朝川真治。

人類史上最強のナルシスト。噂だが、私が好きらしい・・・（ウエエエエエ！）

2つ上の先輩。

「そっか、そういえばコイツ服部の高校の先輩だったんだ・・・」

「ほお、これが悪魔か」

「これって言うな！バカが！」

「ははは、それにしても、ホントかね、悪魔なんて」

コイツとしゃべっていると、イライラする。

他の人と話そう。

「あれ、こんなのが居て、なんで小島さんとか鵜久森さんとかが居ないの？」

「それが・・・部屋がいっぱいで・・・」

「そつか・・・」

お前の優先順位は、小島さんたちより、木村や朝川なのか・・・服部よ。

準備が整った。

「えー、ではリナちゃん歓迎パーティを開こうと思います。なお、このパーティは・・・」

「・・・なんだよ、早く言えよ」

「当然、無礼講で行います！」

「イエエエイ！」

「無礼講ってなんですか？」

「目上の人にもタメ口聞いてもいいってことだよ」

「え！そんなことしてもいいんですか！？」

「うん、だから今日は、敬語はつかわなくてもいいよ」

「いや、私は子供なのでいいです」

「いいの？まあ、いいけどさ」

その後は、みんな飲んで食べて、どんちゃん騒ぎだった。

みんな、いろいろリナに質問したりしていた。

愚痴もこぼしていた。（木村）

その愚痴の中の、1つを紹介しよう。

『真知子に娘を連れて逃げられて・・・うっうっ・・・』

いやあ、かわいそうだったなあ（笑）。

パーティ開始から3時間後・・・。

「バーン！」

ドアが勢いよく開いた。

「る・・・瑠璃さん！」

「何で呼んでくれなかったのよ!？」

「だってあんた、今日彼氏とデートじゃなかったの!？」

「今日は彼氏夕方からは駄目になったから、朝にただけよ!パーティだって教えてくれればすぐに来たのに!」

「す・・・すいません」

「まあ、まだやるから、一緒に飲も！」

「うん・・・、リナちゃん隣いい？」

「いいですよ」

「あつ、ついでに無礼講だからね」

「あつそうなの？」

「うん」

「じゃあ・・・おい木村のハゲ！」

あ。

ヤバイ。

「待つて！瑠璃！木村さんはそつとしといて！」

「なんでー？奥さんにでも逃げられたの？」

「あ」

「あゝあ、やつちゃった」

「え！図星なの！？」

「じゃあ、私はこれで・・・」

「あー！すいません！本当だとは思わなくて・・・！」

「気にしないでくれ・・・」

「木村さんー！！」

そうして、木村は走って、誰も待たない家へと帰っていった。

「まあ、そんなこともあるさ・・・それにしても気の毒だなキムさん」

「ですよね・・・朝川さん」

「さ、気を取り直して、続けよう！」

しかし、1時間後

「みんなー！」

「わー！木村さん！」

「どうしたんですか！？」

「やった！さっき電話したら帰ってきてくれたよ！」

「奥さんですか？」

「ああ！」

いきなりハイテンションだな、おい。

「よかったですね!」

「よし、じゃあ、今から、木村さんのためのパーティーに変更!」

「リナ、別にいいよね?」

「はい、私も嬉しいですし、大丈夫です!」

「よし、今日は飲むぞー!」

そして、パーティーは深夜まで続いた。

悪魔がやってきた！～番外編～（前書き）

この番外編では、主役はネコのみっちー！
覚えている人は、覚えているはず！

“小説紹介”で、1度だけ、名前だけ出てきました、みっちー君の
1日！

悪魔がやってきた！～番外編～

やあ、僕ネコのみっちー。

3歳の“オス”ネコ。

僕は、千葉というところの、とあるマンション裏に住んでいる。

親は、車にひかれて、僕が、2歳のときに死んじゃった。

ところで、なんで僕が“悪魔がやってきた！～番外編～”に出ているかというと、小説紹介以

来、1度も名前すら呼ばれなかったから。作者憎い。（すいません
というわけで、今回は、僕の1日を紹介しようと思います。

ではでは。

一日の始まりは、挨拶から！

朝のランニングでこの辺を走っているおじさん、おばさんにご挨拶！

「おはよう、ネコちゃん！」

僕は、人間の言葉がなんとなくだが、理解できるんだ。

「おはようございます」

と、返しているつもりでも、人には、ニャー、としか聞こえていないのだろう。

そして、朝ごはんは、この付近に住んでいる、おばちゃんに、毎朝、キャットフード、あるい

は、魚（たぶんその前の日の残り物だろう）を置いてくれる。

「おいしい？」

と、いつも聞かれる。

そうしたら僕は、

「うん、ありがとう」

って、返すんだけど、やっぱり、ニャー、としか聞こえていないのだろう。

でも、このおばちゃん、ネコの言葉がわかるみたい。

僕が、おいしい、と言うと、うんうん、と頷いてくれる。

僕は、毎朝、ご飯をくれて、僕の返事に答えてくれる、このおばちゃんが好きだ。

正直、このおばちゃんがいないと、僕は、生きていけないと思う。

さてさて、コートを着たおじさんや、制服を着た人たちが、僕の前を通るころ、ときどき現れ

る、ある人がいる。

その人は、女の人なんだ。

僕の頭を撫でて、こう言うんだ。

「やばいよ、みっちー君、きみメツチャかわいい!!」

そして、抱きしめる。

僕は、これが堪らず痛い。

息が出来ない状態で、かすれ声で、ニヤー、と鳴くと、この人は、放してくれる。

でももし、ニヤー、と言えないぐらい締め付けられたらと思うと、いつもゾッとする。

ちなみに、僕の名前は、この人が決めた。

オスなのに、みっちー、だなんて、まるでイジメじゃないか。

お昼は、適当に残飯をあさる。

いわゆる、ノラネコな僕。

あ、でもでも、ノラの中じゃあイケメンだよ。

だからみんなかわいがってくれるんだ。（でも人から見たらかわいい？）

2時くらいになると、ちょうどお日様がぼかぼかして、気持ち良い頃になる。

だから、僕はこの時を絶対逃さない。

屋根に上り、捨てられた毛布にダイブ！

そこで、ぐっすり眠り、お日様が沈むまで、起きない。

寒い、そう思ったときは、もうお日様はいない。

夜は、まだぬくい体をゆっくり起こし、あの場所に戻る。

そうして、僕はこう叫ぶ。

「おばちゃん！腹減ったよー！飯ー！」

まあ、汚い言葉を使っても、実際、人には聞こえないからね。

「はいはい、そんなに怒らないでね。はい、ご飯よ」

やっぱり優しいおばちゃん。

僕は大好きだ。

そして、本日のディナーは、マグロ！

いやー、ずいぶん脂ののったマグロなこと。

「今日は、中トロ！あんたのために買ってきたのよ」

うわぁ！

トロなんて・・・始めてだぁ！

今日はラッキーデーだ！

ということで、少しの間、待っててね。

ふう、お待たせしました！

さ、こんなものかな。

これで、僕はおばちゃんが用意してくれた僕専用のベッドに入って、夢の中に入るだけ。

なんて思っていると、

「ただいま〜！ みつちいー！」

ぐあああああああ！！

死に物狂いで、逃げてきました。

ああ、なんだか体が重い……。

疲れたよ……。

ああ……なんだかとても眠いよ……。

じゃあ、まだまだ話すことはたくさんあるけど、それは、また違うときに話そう。

番外編なんか使って僕のことを紹介しても、本編で出してくれるかわからないけど（作者が）

いつまでも、未永く“悪魔がやってきた！”見守ってください。

僕も、できるだけ、目立つように行動をとります！

以上！ノラネコのみっちーでした！

女の子：「あー！ネコちゃんだー」

ぎゃあああああ！

悪魔がやってきた！番外編（後書き）

今回は、番外編で、ネコのみっちーを主役にしましたが、次のときは、また、目立たない人を主役にして、番外編を書きたいと思っています。

えー、評価・ご感想、心よりお待ちしております。

悪魔がやってきた！〜10〜

昨夜の、リナ歓迎パーティ&木村（嫁）離婚取り消し良かったねパーティで、夜遅くまで騒いでいた私たち。

朝川は、12時ごろに家に帰った。

木村は、1時ごろに帰り、そのころ瑠璃はぐっすり寝ていた。

気づいたら、若い者しかいなく、うるさい人は帰り（1人は睡眠中）、沈黙が長く続いていた。

た。

さすがにその空気に耐えられなくなって、真央、そして、国分君は帰ってしまった。

そこで、だ。

普通なら、空気をよんで、私も帰るところだが、1つ、1つだけ忘れていたことがあった。

そう。

ぐっすり眠る瑠璃。

さて、そのあと私がとった行動、それを読者の皆様にも考えてみて

欲しい。

1、起こしてあげる。

2、仕方ないのでたたき起こす！

3、置いていく。

さて、大体予想できただろうか。

そう、答えは・・・。

当然3！

だったのだが・・・。

瑠璃さん、私が帰ろうとしたら、急に起きちゃったんだね。

まあ、そんなに怒ってなかったし、そのまま帰った。

リナをおぶって。

朝。

おああ！

や、やばい・・・。

8時だ・・・。

すぐに支度をして、すぐに出かけた。

リナは眠っている。

「行つてきます!」

会社。

「おはようございます!」

8:20

無事、到着。

昨日のパーティで、みんな眠たそうな顔をしている。

朝川は、完全に鼾いびきをかいて寝ている。

そのまま、永眠して欲しいなあ、先輩。

瑠璃は、もう駄目みたい。

木村は死にそう。

国分君はまだマシ。

真央も。

服部は目を開けて半気絶。

私？

私はとつくに眠りかけているよ。

ああ・・・眠りたい・・・。

その日、仕事より、眠気に勝つことに全身全霊を賭けた私たち。

ようやく帰れる。

仕事終了！

「さゝて、かえるべかゝ」

どこの方言だ？

「んだべゝ、かえるべよゝ」

だから、どこの方言だって。

「おら、ねむいだよ」

真央・・・キャラと言葉があっていない！

やめなさい！

「さー、早く帰ってねるべよ」

あ、うつっちゃった。

家、到着。

「ただいま」

あら、リナちゃん寝ていらっしやる。

・・・いいなあ、私も今日一日寝たかったなあ。

そして、今日ほとんど眠っていたのが、朝川。

・・・さ、もう寝よう！

ねむいったらありゃしない。

でも、何か忘れてるような・・・。

まあいいや！

寝ましよう。

そのころ、会社。

「ぐおおー、スー、ぐおおー・・・うん、むにゃむにゃ・・・」

朝川、安眠中。

しかし、このあと、警備員に起こされる、朝川であった。

悪魔がやってきた！〜11〜

シャカシャカ、チャンチャン〜

「朝っぱらからメールかよ・・・瑠璃か？」

・・・あ。

鵜久森^{うぐもり}さんだ！

鵜久森^{うぐもりこうすけ}浩輔、私たちの10歳上の先輩。

趣味、ドライブらしい。

家庭、嫁、長男（7歳）、次男（5歳）、長女（3歳）の、5人家族。

の、鵜久森さんが、私に何の用だろ？

『今日、小島たちと焼肉行くんだけど、来ない？』

や、焼肉・・・。

・・・。

最近やばい私の体・・・。

これ以上脂っこいもん食べると、もっと太っちゃうよ・・・。

でもそんなの関係ねえ！

『行きます！ところで、おごり・・・ですよ？』

ふう・・・おごりじゃなかったら、行かない。

いや、やっぱ行く。

お、来た来た。

『まあ、今日だけな。ところで、瑠璃と朝川はどうする？あ、木村さんも。』

あ、朝川と木村・・・。

瑠璃は、女一人だからいいけど・・・。

女？

あ、リナ。

ていうか、最近この子出番が少ないよね・・・。

よし、じゃあ今日は目立たしてやろう。

『いや、リナのこともありますし、今日はパスします。』

・・・そういえば、リナって、このごろ起きるの遅いな。

そろそろ生活バランスが崩れてきたな。（ま、私もだけど）

来た。

『わかった。また誘うわ。じゃあ』

・・・あゝあ、焼肉・・・。

仕方ない、仕方なかったんだよ！

「リナ！朝だよ！」

「ふゝゝ、ねむいゝゝ」

リナは、手で目をこすりながら、眠たそうにこちらを見つめている。

か・・・かわいい・・・！

「いやゝ、もう我慢できん！」

「えー！なんですか！？」

私がリナに抱きつこうとした次の瞬間。

ガッシャーン！

窓ガラスが割れて、その前に羽を生やし、黒い仮面を付けた男の子が立っていた。

な・・・なんだこれ？

いつかどこかでこれに似たシーンがあったような・・・

ていうか、またですか？

なんなんですか！？

一体！？

「お・・・お兄ちゃん！」

「お・・・お兄ちゃん？え？これリナのお兄ちゃん！？」

「・・・ふん、リナ！来い！」

真紅の眼、眼が隠れるくらいの長さの髪、黒くて、すごい服、同様にズボン、黒羽。

なんかさ、悪魔って、みんなこんな服なのかな・・・。

って、それどころじゃない。

「待って！」

「なんだ人間」

「リナは・・・」

そういえば、いつかは帰らなきゃって言っていたけど・・・でも・・・！

「お兄ちゃん！帰ってよ！」

・・・リナ！

「リナ、何を言ってる。さ、帰るぞ！親父もお袋も待ってるぞ」

「分かってるよ！でも、もうちょっとだけ待って！」

「リナ、わがまま言うな」

「ね、おねがい！」

「・・・リナ、お前はこの人間がといたいのか？」

「そうだよ、私、この人が好きだから」

「なら、そいつが俺に殺されてもいいのか？」

「お兄ちゃん！！！」

「悪魔の力の前では、こんな小さい国1つぐらい、簡単に壊せるんだぞ」

「やめて！」

「まあ、それは冗談だ」

「・・・！私絶対行かない！」

「・・・ふう。仕方ないな・・・悪く思っなよ、リナ」

な・・・何？

兄弟喧嘩！？

・・・の割には、スケールがでかいというか・・・。

「リーユ・ルオカ・ナーセ・キーク・・・！」

な・・・リナ兄が何か唱え出した！

「お兄ちゃん・・・！？」

「ダウン・ダーク・テンツ！」

そう言い放った、次の瞬間、リナ兄の右手から、青いものが放たれた。

「あ！危ないリナ！」

私は、リナをかばい、背中で青いものを受けた。

「・・・うがつー！」

「おねえちゃんー！」

「なに！？」

私は、部屋の壁に叩きつけられた。

悪魔がやってきた！〜12〜

「おねえちゃん！」

「騒ぐな、リナ。今はただ気絶させるための一発だ」

「おねえちゃん・・・私をかばって・・・」

「（人間が他界の悪魔をかばった・・・こいつ・・・）」

「ヒック、エグ・・・」

「リナ・・・お前、この人間が好きか？」

「さっきも言ったじゃん・・・大好きだよ！」

「お前・・・その人間に愛されているんだな」

「え？」

「いつも仕事で遊んでくれない親父、家事で忙しくて構ってくれないお袋・・・」

「何を言ってるの？」

「リナ・・・お前、親に愛されないから逃げてきたのか？」

「ち・・・違うよ！私はただ、興味があつて、入って・・・」

「あれだけ親父に注意されていたのにか？」

「・・・ごめんなさい」

「俺に言っな、俺に・・・帰ってから親父に直接言え」

「まだ！まだ帰りたくない！」

「リナ」

「嫌だ！嫌だ嫌だ！」

「違う、聞け」

「え？」

「気が変わった、もう少し待とう」

「え！？ど、どうして？」

「さあな・・・親父とお袋には、俺が何とか言っとくよ」

「お兄ちゃん！」

「でも、目立った行動するなよ。次俺が来たら、今度こそ帰るぞ」

「うん！ありがと！」

「・・・じゃあな」

【バサッバサッバサッバサ！】

．．．．．。

．．．．．。

．．．．．イタタ．．。

あれ？

．．．私、何してたんだっけ？

ここは．．．私の家だ。

．．．あ！

そうだ！

リナ！

「リナ！どこ！？」

あれ？

いない！？

リナがいない、それにあいつも．．．！

「リナー！」

「あ、起きたの!？」

「起きたのじゃないよ!リナ!リナがいなくて大変なのに・・・つて」

「どうしたの？」

「リナアアアアアアアアアアアアアア!！」

「キヤアアアアアアアアアアアアアア!！」

私はリナに、突進しながら抱きついた。

「大丈夫!？何もされなかった!？」

「何言ってるの？」

「へ!？」

「どうかしたの？」

リナは、不思議そうな顔でこちらを見ている。

「だって、さっきリナのお兄さんが窓を突き破って・・・」

窓!!

「あ・・・あれ!？何もなっていない・・・」

「おねえちゃん、変な夢見てたんだね」

「あ・・・あれえ？」

へ・・・変だな・・・。

「あ、そういえば痛みもなく・・・」

なかった。

「ぎゃああ！アバラが！アバラがー！」

「ああ、おねえちゃんさつきね、自分の脇を思いっきり殴ってたよ」

「んなわけあるかー！」

そのあと、リナの説明を聞いて、少し照れて、納得した私。

「そっか・・・そうなんだ」

「そう・・・そうなんです」

「はあ・・・お兄ちゃんっていいなあ・・・」

「・・・はい？」

「魔界」

ライアス：「すみません、リナが見つからず、帰ってきました」

エルル王：「任せると言ったのは誰だ？」

エルル王妃：「まったく、どうするのよ！」

ライアス：「・・・親父、いい加減にしろよ」

エルル王：「なに？」

ライアス：「お前らさあ、本当に自分の娘を愛しているなら自分達で探せよ！」

エルル王妃：「なんていう汚い言葉！！」

エルル王：「お前だって分かっているだろ！私たちは忙しいし、それに危ないだろ！」

ライアス：「危ないと分かっている、自分の息子に躊躇なく行かせたのか！？」

エルル王：「お、お前が任せろなどというからだろ！」

ライアス：「それに、娘のためなら自分の命を賭けてまで助けに行くだろ！？」

エルル王：「・・・もういい！！コイツを牢屋に叩きこめえい！！」

エルル王妃：「あ、あなた！そこまでしなくても・・・！」

エルル王：「いいんだ！これぐらいしないと、頭がよく冷えないだろうからな！」

エルル王妃：「私も、ライアスに賛成です」

エルル王：「なにい！？」

エルル王妃：「だから、私たちも行きましょう！」

エルル王：「・・・そもそも、危ないと言ったのはお前じゃないか！」

エルル王妃：「あなただって、今は違うかもとか言ってたじゃないですか！！」

エルル王：「ああもう！ドイツもコイツも！コイツもぶち込んでけ！！」

エルル王妃：「・・・！！」

エルル王：「（全てはリナが悪いのだ）」

エルル王：「仕方ないな、リナはもう私たちの家族ではない。搜索をやめさせる」

エルル王：『魔界王様、リナの搜索を打ち切りにして下さい。理由
はまた後ほど・・・』

悪魔がやってきた！〜13〜

ぐおおおお・・・！

ぬうううう・・・！

激痛がああ・・・！

アバラがあ・・・！

あ、こんにちは。

今日も面白い、優子おねえさんです。

今？

今ね、昨日のリナの兄貴、ライアスから受けた一発が痛くて、

「ぐあああ！激痛がああああ！！アバラがああああ！！！！」

って、なってる。

あ、なんで名前知っているかというとな、昨日リナに聞いたから。

身長、体重、趣味、好きな娘の名前、その娘の写真まで見せてもらった。（かわいかった）

ここまでやったら、犯罪？

NO、NO、だって、私は被害者だもの。

・・・なんか、『人間だもの』みたいになっちゃった。

『被害者だもの』・・・。

これよくない？

私にしては、いいと思わない？

「優子さん、電話」

「おお、家電なんて久しぶりだな。誰だろう？」

家の電話は、約1ヶ月放置してたからな。

「もしもし」

『あ、もしもし？優子？』

げ！

こ・・・この声は・・・！！

「おかあさん！？珍しい・・・どしたの？何で携帯に電話しないの？」

『あはは、携帯落としちゃってね、まだ見つからないのよ』

「え！？どれくらい前に？」

『・・・3ヶ月前なんだよね、あはは』

あはは、じゃねえよ！

3ヶ月って、なにそれ！？

普通、拾ったら電話してくれるだろ？

あ、まさか・・・。

「おかあさん、携帯の利用料金、まさか・・・払ってる？」

『うん』

はい、なんの躊躇もなく、2文字で即答。

「いくら？」

『3ヶ月で、30万ぐらい』

「バツカじゃねーの！？」

思わず大声を上げてしまった。

『なによ、そんな大声上げて』

「もう嫌だ、こんな親」

その後も、母の呆れる話を聞いて、喝を入れまくった私。

『ところで優子!』

「話を変えるな!」

『どうせ、今はゴールデンウィークなんだから、暇でしょ?』

「えゝ・・・まあ、暇といえばね・・・」

『じゃあ、家に帰ってきなさい』

「は!?!」

『いいじゃない。あんた、去年は来てくれたじゃない』

「いや、あの時はあの時だから・・・今年に行けない・・・かも」

やばい・・・リナがいるから、今年はいけない・・・どうやって断るか・・・。

あ、そうだ!瑠璃に預ければいいんだ!

私がリナに目をやると、リナは、大きな声で。

「なに?どこ行くの!?!私も行く!」

わ!ちよつと!

『優子！だれ！？そこにいるのは！？』

もういいや。

「悪魔です」

『なんだ、悪魔か』

「うん、悪魔の子」

『じゃあ、今年は、その悪魔の子を連れてくるのね？分かった、じやあ、ごちそう作るね！』

「え！？まだ行くとは」

『プツ・・・プー・・・プー・・・』

えええ・・・。

これ連れてくの？

うわ、すごいキラキラした目でこっち見てるよ。

・・・仕方ないなあ・・・。

「リナ！明日出かけるよ！」

「え！どこ？どこ？」

「楽しいところ」

リナが抱きついてきた。

「優子さん大好き!!」

【ギュー!】

「ぐああああ!!アバラがああああ!!」

悪魔がやってきた！〜14〜

「優子さん！優子さん！そのたっかいのはなに！？」

リナが、キラキラした目で、こちらを見ながら、問いかけてきた。

「東京タワー」

「とうきょうたわー！？」

「そう、東京タワー」

「と、とうきょうたわー！？」

「そう、東京タワー」

「とと、とうきょう」

いつまで続ける気だ！？

「・・・東京タワーだよ」

「とと、東京タワー！？」

お？

やっと、文字が直ったぞ？

「そう、東京タワー」

「そっか、とうきょうたわーかあ」

あ、戻った。

あ、ども、優子です。

最近、挨拶に興味を持ちまして。

いま？

今は、私の実家の横浜に帰る途中、東京で少し、ぶらりと遊んでいる。

「優子さん！」

「なに？」

「これ、上りたい！」

「うーん・・・金かかるしなあ・・・」

「・・・【キラキラ】」

うー！

し、しまった！

そんなに目をキラキラさせないで！

ああ、もつだめ……。

「仕方ない。よし、上るか！」

「わーい」

「じゃあ、早速……ってあれ？リナ？どこ？」

「優子さん……これ、ほんとに高いですね」

かつて、東京タワーを上ったクライマーがいただろうか？

リナは、今まさに、人類史上初の挑戦をしようとしている。

ちよ、ちよ、ちよ！

まっちなさーい！

「ちよ、リナアア！てめ、コルア！どこから上ってんの！？」

「あ、優子さんには、そこに階段がありますよ」

「ああ、ありがとう。って、違う！降りなさーい！！」

「はーい……」

【チーン！】

悪魔がやってきた！〜15〜

あ、あれ？

どこ行つた！？

「優子さん！」

「は、リナ！？てめ、コルア！降りなさい！！」

「今から、てっぺんまで行つてきます！」

かつて、クライマーで、『東京タワーを上る』という偉業を達成した人はいるであろうか？

いや、いない。

しかし今、リナが前人未到の、『東京タワー制覇』をしようとしている。

止めるべきか？

・・・答えはもちろん！！

「降りろおおおおお！！って、あれ？考えているうちに、どっかいっちゃた？」

どこだ！？

リナ！？

【よじよじ】

そこかああああああああ！！

「ちょ、リナアア！！もうそんなに行ったの！？降りてきなさい」

「見てくださあゝゝい！！」

あゝ、もう知らない！

知らないからね。

・・・まったく、ホントに子供は自分のことしか考えていないってゆうか・・・。

周りのことを考えないってゆうか・・・。

「・・・う・・・」

ん？

なにか聞こえたような・・・？

「・・・う・・・さ・・・」

やっぱり、何か聞こえる！？

「きゃあああ！優子さん！」

「どわあああ！リナが落ちてき」

【バサ！】

「・・・あれ！？リナアア！？浮いてる！？と、飛べるようになったの！？」

「えへへ」

「はあゝゝ・・・おねがいだから、もう危険なことしないで！」

「はい！もうしません！」

「絶対？」

「・・・絶対！」

何で今躊躇した！？

「じゃあ、もう電車乗るよ」

「はい」

悪魔がやってきた！〜16〜

市村家、到着。

私の家、木造建築、一階建て。

古いよ、広いよ。

「うわ・・・」

やべえ。リナがマジで嫌そうな顔してる。

「ここ・・・ですか？」

「ここ・・・ですよ？」

「そう・・・ですか」

やっぱり嫌なんだなあ。

「あ、おかえり〜優子！」

げ、お母さん。

「あー、その子、悪魔の子ね？」

「はじめまして！」

「わ、えっらいわねえ〜！ちゃんと挨拶できるの！」

うちの母は、なんでこんなに疑いのない目をしているんだろうか？

悪魔ときいて、『なんだ、悪魔か』って流せるからね。

「優子、今日は剛士たけしも、ミナも帰ってきてるのよ！」

「ええ！？兄貴とミナが！？なんで！？仕事じゃないの！？」

「今年は休みが取れたんだって」

なーんでさーあ、こんなときに限って、休みが取れるかなー？しかも二人同時に。

「お父さん！優子が来たよ！」

「おー、そうか」

そう言って、家からお父さんが来た。

「おー、優子！ん？優子！お前、もしかしてその子は……！？」

これがうちの父親。

名を、市村 厳重げんじゅうと云う。

げんじゅうって、いつの時代の名前だよ！？

って思うと思います。

ちなみに、父と母は、4歳のころから知り合いで、父が、大学卒業したときに、結婚。

「もしや、“できちゃった結婚”では無いだろうな!？」

「はい!？」

なぜ星がつく!？」

「お父さん!昨日言ったでしょう!？」

「ああ、そうだったなあ。悪魔の子かあ、女の子かあ」

「はじめまして!」

「おお、偉いなあ!この年でこんなに利口なのか!へえ、優子より頭良いんじゃないのか?」

ム力。

「さ、家に入りましょ。さ・・・えーと?」

お、名前が分からないんだな。

だが、うちの母の場合・・・。

「えっと・・・じゃ、家に入りましょ、悪魔ちゃん!」

ほら、名前を聞かない。

「ホスマリン＝エルル＝リナレスです」

「ホス・・・エール？・・・リナ？」

ほら困ってる。

リナの名前って、難しいんだよな。

「じゃあ、リナちゃんね？」

「はい」

・・・うわ。

コレって遺伝かな？

まったく同じパターンになってしまった・・・。
(第二話参照)

「優子！早く入りなさい！」

「あ、はいはい」

「『はい』は一回！」

「はい!!」

まだ子供みたいに扱われている私。

「優子お！見てみて！」

いきなり飛び出してきたのは、ミナ。

名を、市村 みなみ 南と言う。

ミナはニツクネーム。

「おわあ！ミナ！？どうしたの！？」

「いいから、あれ見て！」

ん？

な！？

あ・・・あれは！！

悪魔がやってきた！〜17〜

あ・・・あれは！？

「ぶははははは！あ、あ、兄貴〜！！なにその頭あああああ！〜！」

あ、兄貴が、あの28年間ロン毛の不良だった兄貴が、丸坊主の好青年！！

ぶはっ！

つける〜！！

「ひーっ！苦しい・・・！」

「うるせえな、ぶっ飛ばすぞ！コルア！」

あと、うちの家族は私以外、全員元ヤン。

うちの兄貴は、そんなに悪くなかった。

なぜなら・・・チャリも乗れなくて、仲間にバカにされて、中学、高校とずっと、ヤンキーで

ありながら、孤立していて、あんまり悪いやつとつるんでいなかったら。

「うはははは！やっぱ笑うつしょ！？」

ミナは、武闘派女暴走族『シラユリ白百合』の、サブリーダー副隊長。

族の仲間達からの、信頼感、評価は、リーダー並に高かったという。

「こら、笑わない!!」

うちの母は、通報回数、1000回以上を誇る、『横浜の害人』と呼ばれた、大物。

「うわっはっはっは!!」

この陽気なおっさん(父)は、こう見えても、な、なんと!

高校生で、本州制覇を果たした、史上最強のヤンキーだったのだ!!

まあ、大学は慶応だったけどね。

すごいよね、これが文武両道ってやつだよな。

「きゃはははははははは!!」

あ、これリナね。

「笑うなよ!これだって、理由があって……!」

「なにがあつたの……ぷっ!」

「む……えつと……かくかくしかじか……」

兄貴の話を聞いていたら、私たちは、段々、笑えなくなってきた。

「そ・・・そうだったんだ」

「なんで、おかあさんに言ってくれなかったの？」

「よし、俺がそいつらをぶっ殺してくる」

まてまてまてまて！！

このクソ親父！！

あんたじゃ、本当に殺しかねないから！！

「頼むよ、親父！！」

オイイイイイイ！！

そこは、頼むなあああ！！

男なら自分でなんとかしろおおおお！！

「がんばって、お父さん！」

「そうだよ！兄貴のために、がんばれ！」

うおおおおい！！

この武力成敗しか考えられないバカ野郎どもおおおおお！！！！

「がんばれ！」

リナアアアアアアア！！

あおつちやだめええええ！！

うちの父は小動物好きだから、たぶん言うこと聞いちゃうんだよ
お！！

「任せなさい」

ほらああああ！！

ああああ、もうこの一家は、本当に……！！

「あのさ、私たち帰っていいかな？」

「おお！？なんでだ優子！？」

「いや、なんか呆れた」

「おお、そうか！」

「……え！？そんだけ」

「ん？どうした？帰らないのか？」

「いや、帰るけど……」

「また来なさいよ」

「はいはい」

もう来ないよ、たぶん。

「あと、兄貴！」

「ん？」

「チャリ乗れるようになった？」

「待てコルア！！優子オオオ！！」

「リナ、乗って！」

「うん？」

リナをおぶって、音速ダーーーーッシュ！！

「ははははは！あーばよとっつぁーん！！」

「く・・・逃げ足の速い・・・！！」

悪魔がやってきた！〜18〜

ここまでくれば、もう大丈夫だろう。

「はあ、はあ、さすがに疲れたね・・・」

そう、私は優子。

兄貴から逃げるため、ざっと、3キロぐらい全力疾走で走ってきた。

え？なぜかって？

そりゃあ・・・

“兄貴が諦めたか・・・と思ったら、車に乗って、追いかけてきたから”だよ。

・・・ね！？そう思うでしょ！？

『そこまでしなくても・・・』や『こいつバカ（アホ、狂ってる）だろ・・・』

っと思うでしょ？

うん、うん。

「ねえ、優子さん」

「うん？」

「あれ・・・」

「ん？」

なんと、そこには・・・

自転車に乗った、兄貴がいて、追いかけてきたのである！

「あ、兄貴！？なんで！？」

「見る！！優子！！乗れるようになった　　ぐはああああ！！！」

あ、ふらついて電柱にぶつかった。

ザマアミロ。

「どんだけ執念深いんだよ！！」

「ま、まてえ～～優子お～～」

「ははは、こんどこそ、あゝばよ、とつつあゝん！！」

この変な兄弟演技に、周りの人、みんなひいちゃってるよ。

ま、まあとにかく！

兄貴を振り切ったわけだから、帰ろう。

くマンション前く

「ねえ、リナ」

「はい？」

「リナって、なんで急に飛べるようになったの？」

「え？」

「教えて」

「えええく・・・」

なんでそんなにカワイイ（嫌そうな）顔をするんだねYOUは！！

「ね、なんで？なんで？」

「がんばって、練習しました！」

「練習って、飛ぶ練習？」

「はい」

「なんで急に・・・？」

「・・・おに・・・」

鬼！？

「え！？鬼！？」

「ち、違います！その・・・」

わー。

恥ずかしそうにもじもじしてるリナカ〜ワイ〜イ

「お・・・お兄ちゃん・・・が・・・か・・・かつこよかったから・・・」
ぽっ」

赤く火照ったリナの顔・・・ぐああああああ！！！！

もう我慢できん！！！！

「偉いぞ！！リナ！！」

「きゅ、急になんですか！？優子さん！？」

「あー、もうずっとこのままでいたい」

「ちょ・・・離し・・・て・・・く・・・だ・・・さい・・・【がくっ】【がくっ】

みっちー：「あああ・・・【がくがく・・・】」

や・・・やばい・・・！！

は、早く逃げなければ・・・！！

「お、みつちー！！」

うわ！

見つかった！！

【ぎゅー！！】

ぎゃああああああああああああ！！！！

悪魔がやってきた！〜19〜

「ふあゝあ・・・」

・・・あゝ、どうも！

市村優子です。

いやゝ、昨日がゴールデンウィーク最終日だったから、

今日ちゃんと起きれるか心配だったけど・・・一応、大丈夫。

「あ・・・」

じゃなかった・・・。

「時計止まってる・・・」

て・・・テレビ・・・！！

『ブウ・・・ン・・・7時28分！7時28分！』

あ・・・あ・・・良かったあ・・・。

ありがとうー！めざしテレビ！

「リナアゝ、朝ゝ」

って、またリナイねえよ・・・。

ん？

何だコレ？

手紙？

え？

えつと・・・なにになに・・・。

『夜です

まかい

でけま

かませ

えすん

らよが

ん
』

・・・ん？

夜です？まかい・・・？あ。魔界か？

夜です。魔界で・・・夜に魔界で・・・？

けまかませえすんらよがん！？

何て書こうとしたんだリナは！？

そつえば、書くのは得意じゃないって言ってたしなあ・・・。

うゝん・・・。

まさか！？

夜に魔界から誰かが来て、リナは連れて行かれて、この手紙を置いていったとか・・・？

おいおい・・・。

まさか、こんな急に最終回かよ！！

もって出たかったのに！！

やっぱあれか！？

作者の野郎、めんどくさくなったな！？（注：違います）

くそ！！

終わりになんかしないよ！

って、どうしよう・・・。

仕事VSリナ・・・READY・・・FIGHT！！

結果

『カタカタ・・・』

『プルルル・・・プルルル』

『きみ、お茶を入れてくれないか？』

すまない！！

読者の方！

そして、リナ！！

私は弱いんだ！！

やっぱりダメ人間だ！！

最後には、やっぱり自分のことしか考えられないんだ私は！！

すまないリナ・・・リナアア・・・！！

〈最終話：さよなら、リナ〉

「どうしたの？優子？そんな顔して・・・」

瑠璃・・・。

ダメだ・・・自分の弱いところなんか、他人に見せられない・・・。

「うっん、なんでもないの！なんでも・・・」

はぁ・・・。

帰宅。

はぁ・・・。

「ただいま・・・」

って言っても、もう誰もいないんだな・・・。

うっ・・・やばい・・・涙が出そう・・・！！

リナ・・・！！

「あ、おかえりなさい！優子さん！」

「うん・・・ただいま・・・って」

「どうしました？」

「リナアアアツ！！??？」

「へー？ど、どうしたんですか！？」

「ま、魔界に帰ったんじゃ・・・!?」

「え？魔界？なんのことですか？」

「だって・・・ほら！この手紙・・・！」

「え？ちゃんと書いてるじゃないですか？」

「え！？ウソ！？」

「ほら、ちゃんと縦に書いてあるじゃないですか」

「え・・・た、縦！？」

「はい」

「え・・・あ・・・」

『夜です
まかい
でけま
かませ
えすん
らよが
ん』

「あ・・・あ・・・なんだ～～～！！」

「あ、もしかして横に読んでました？」

「そうだよぉ〜」

「・・・あはは！普通、変だと思いますよ！？」

「私は普通じゃないもん」

「あはは！」

「はぁ〜」

安心したあ。

ふう・・・。

ってことで、

最終話と思わして、まだまだ続きます！

これからも、お願いします！！

自分の弱さが身に染みた1日でした。

悪魔がやってきた！番外編

「・・・」

・・・。

「桃子！こんどの日曜日さ・・・」

どうせ、食事か何かの誘いでしょ・・・。

「結構です」

「え！？」

「お金ももつたいないし・・・」

「ま、まだ何も言っていないでしょう！？」

「市村さんの顔を見れば分かります。私を誘いに来たんですよね？」

「そうだけど・・・」

「私は結構です。やっぱりお金と時間の無駄だから」

「な、なんだよ！その言い方！！人がせつかくお前みたいなやつ誘ってんのに！！」

「・・・私みたいやつで悪かったですね」

「そうだよ！！それを、時間やら金の無駄とか言って！！」

「すみませんね。私はあなた達とは、ココ（頭）が違っんです。考えて行動しているんです」

「あー！そうかいそうかい！わかったよ！もう桃子なんか誘わないからね！！」

「御勝手に・・・」

・・・私の周りの人は、なんでこう、頭が悪いのかな？

考えてみれば、同窓会だつて必要ないと思わない？

ただ、昔の友達や先生に会うだけで・・・。

飲み会・合コン・送別会・遊び・・・。

全部お金と時間の無駄だと思わないのかな？

年に100回飲み会に行ったら、どれだけお金を消費すると思っっているの？

考えれば、すぐに分かるのに・・・。

聞いている通り、こんな私に友達なんて、在やしない。

友達だって、いない。

成績は、いつも学校のトップ3に入っていた・・・。

嫌われたって、構わない・・・。

「誰か！誰か助けて！」

・・・あれ？

私・・・今なんで逃げているの？

『まてえ～～～！！』

木村さん？

なんで木村さんが私を殺そうとしているの？

『桃子お～～！！』

『マテエエエ！！』

『うおお～～！！』

みんな・・・？

「どっどっどっど」

『ドウシテ?』

『お前が悪いんだぞお』

『お前のその性格があ!』

そんな・・・私は・・・いままで、真面目に生きてきたのに・・・!

なんで・・・なんでこんな人たちに殺されなきゃいけないの?

誰か・・・助けて!!

『桃子お!!』

市村さん!?

『捕まって!』

「どうして私を助けようとするの?私・・・あなたに悪いことしたのに!」

悪いこと?

何を言ってるのあたし!?

それじゃ、あのことが悪いみたいじゃない!

『どうして?そんなの決まってるじゃん!』

『ぐおおお！待てエ！』

『早く捕まって！』

・
・
・
・。

・
・
・
・。

は・・・夢？

あれ？

涙が・・・。

「なんだ・・・夢か」

・
・
・
・。

『どうして助けるの？』

『そんなの決まってるじゃん！』

は・・・またあの夢のことを・・・。

はあ・・・もう夢だったんだから、気にしない、気にしない！

「桃子！」

いきなり、市村さんが私に飛び掛ってきた。

「・・・何？」

「昨日のこと！ゴメンね！」

「なんですか？いきなり？」

「ゴメンね・・・急に・・・自分が悪かったって思ってた・・・」

泣きながら訴える・・・市村さん・・・初めてみた・・・。

「違う、あなたは悪くない。私が間違っていたの」

「え？」

「お金と時間の無駄なんて言ってごめんね。優子」

「な、何？あんたこそ急に・・・」

「ちょっとね、変な夢見ちゃって」

「え？私も変な夢見た！」

「え？」

「まさかその夢って・・・」

「あははは！そうそう、それで木村さんがすごい顔で追いかけてきて・・・！」

「くすくす・・・面白かったね」

「なにより急に女の子っぽくなって」

「あんたのおかげよ、優子」

「どういたしまして」

「・・・なあ・・・野田さん・・・キャラ違くない？」

「ああ・・・きつと、作者が・・・」

「おい！それ以上は禁句だぞ！」

友達は大切だって分かった。

その友達のために、何かをする・・・。

。 教えられちゃったなあ・・・（キャラまで変えられちゃった・・・）

実は、私は頭なんか良くないんだろうなあ。

ふふふ、今日は、楽しかったな。

明日が楽しみ・・・。

こんな感じ・・・何年ぶりかな・・・。

優子・・・ありがとう・・・。

悪魔がやってきた！〜20〜

この日本では、今さまざまな芸能人が輩出されている・・・。

近年では、小島よしお、藤崎マーケット、サンドウィッチマンなど・
・。

しかし！

本物はここにいる！

るり・るり
瑠璃瑠璃！！

名前からインパクトがあり、顔は良いし、頭良いし、天然だし！！

これぞ、完璧なる史上最強のポケ芸人！

神様のいたずらとしか思えない！

そして、瑠璃一人ポケでは、通用しない！！

そこで、私だああ！！

優子さんだああああ！！

史上最強のツッコミお姉さん！！

優子さんだああああ！！（2回目）

世界遺産並みのお姉さん!!

優子さんだああああ!! (3回目)

すばらしいお姉さん!!

優子さんだああああ!! (しつこい)

強くて、ナイスバディで、優しくて、素敵なお姉さん!!

優子さんだああああ!! (段々話題変わってる)

さっきから、作者がうるさいと思ってるお姉さん!!

優子さんだああああ!! (お前がうるさい)

そうそう、瑠璃って、本当に神がかりなボケの天才で・・・。

たとえば私が、

「明日、飲み会行く?」

って、言ったら、

「ノミ買いに行ってどうするのよ!! あははは!!」

・・・「ノミ買い行く?」じゃなくて、「飲み会行く?」だよ・・・。

どうしたら、そう聞こえるんだよ……。

あと。

「ねえ、コブクロの“5296”どこにもないんだけど……」

って、聞いたら、

「“0157”のコブクロがどこにもいない？たぶん、家で寝てるよ」

……。

ねえ……0157ってたぶん、もうないよね？

なんで“5296”が、“0157”に変わるかなあ……。

なんで、コブクロのニューアルバムが、危ない伝染病に変わるかな……。

それで、小淵さんと黒田さんが亡くなったら、みんな悲しむよ!？

ってな、感じで……。

ん？

私？

私は・・・。

「おお？そうそう、最近ノミ買つのはまって・・・って、そんなわけあるかい！」

とか、

「うんうん、0157って、大変だよね～・・・って、アホか!!」
って、ツツコンでる。

・・・どう？

(メツチャ普通、いや、それ以下)

今、作者の声が聞こえた・・・。

(みんな同じ事思ってるはず)

酷^{ひど}い・・・。

(酷いのはお前だ)

・・・！

「し・・・死にさせえ!!!!」

「わ！優子さん!？びっくりした!」

「は・・・あれ？夢？」

「何の夢見たんですか・・・」

「あれ？どんな夢だったけ・・・？」

「え・・・？」

悪魔がやってきた！〜21〜

く魔界、エルル区、牢獄く

ライアス：「お袋・・・聞こえるか？」

エルル王妃：「なに？ライアス？」

ライアス：「ココに閉じ込められてから、もう1ヶ月・・・俺はそろそろ、脱出したんだけど

ど・・・お袋はどうする？」

エルル王妃：「・・・あなただけで行きなさい」

ライアス：「でも・・・そしたらお袋が・・・」

エルル王妃：「大丈夫・・・私は、もうあの人の妻ではないから・・・」

ライアス：「え！？それって・・・離婚？」

エルル王妃：「ええ、このお城は、関係者以外立ち入り禁止だから・・・それに、何の罪も無

い人を、監禁すれば、法に反するから・・・」

ライアス：「わかったよ・・・“ヴァンガーディアン”マリアノー”さん」

マリアノーン：「あら、よく知ってるわね」

ライアス：「もと母だからな」

マリアノーン：「じゃあ、いつてらっしゃい。無事でね」

ライアス：「そっちこそな。ひと段落したらまた帰ってくるよ」

【ドウ・・・ン！】

兵士A：「ら、ライアスが脱獄しました！」

エルル王：「フン、放っておけ」

兵士B：「王様！王妃が呼んでおります！」

エルル王：「知らん！何を伝えたいのか聞いて来い！」

兵士B：「それが・・・離婚したいと・・・」

エルル王：「なあんだとおゝ！？」

エルル王：「・・・何を考えているんだ、お前は！」

マリアノーン：「今、ここで離婚を承諾してください」

エルル王：「何故だ？」

マリアノーン：「あなたといると気色悪いからよ」

エルル王：「むぬぬ．．！！わかった！もうお前などいらん！」

マリアノーン：「じゃあ、離婚を承諾してくれるんですね？」

エルル王：「ああ！さっさと出て行け！」

マリアノーン：「（やった．．．やったわよ、ライアス）」

ライアス：「さて、行くか．．．地球に」

【ぎゅううんー！】

～現代～

「ふあゝあ！」

かったりゝ．．．。

まったく．．．なんで日曜なのに、俺だけ仕事しなきゃいけないんだよ．．．。

こうして、朝早くから起きて・・・くそ・・・。

「ちよつと失礼」

「ああ・・・つて、お前誰だよ!？」

え!？

は!？

ん!？

何事!？

なんだ!？

朝川家に侵入者発見！

早急に対処せよ！

「なな、何だお前!？なんで窓から!？」

ん？

あれ・・・こいつ・・・羽に、尻尾が付いて・・・は！

「お前・・・まさか・・・悪魔？」

「ん？ああ・・・そうだが・・・」

なにいいいい!?

「ああ、そうそう、君はリナレスっていう悪魔の女の子を知らないか？」

「リナレスって・・・リナのことかい？」

「ん・・・そうそう!」

「ああ、なら知ってるよ」

これって・・・優子と仲良くなるチャンスか!?

ああ、神様っているんだなあ・・・。

「そうか!じゃあ、当分の間、ここに住ましてもらうよ」

「ああ・・・そんなのお安い御用・・・って」

なにいい!?

ちょ、まで!

え?

「それはちよつと・・・」

「じゃあ、他を当たるか・・・」

え？それじゃあ、俺と優子のラブラブライフがあああ！

「わかった、やっぱここにいていいぞ！」

「は？」

「とにかくだ！」

「はあ・・・ありがとう」

よし・・・よし！

「何興奮してんだ・・・こいつ」

「うわっははははははは！」

「変だよ・・・こいつ」

わはははははははははは！

・・・あ、今日の仕事は午前中だけだ・・・。

・・・よし。

悪魔がやってきた！〜22〜

「ああ・・・なんて素敵な朝なのでしょう・・・」

「でしょう・・・」

AM 7:00

日曜の今日、何故だか早く起床。

久しぶりに、豆からコーヒーを作り、久しぶりに、ゆっくり朝食。

・・・なんだか今日は良いことありそう。

『シャカシャカ・・・』

お？

メールだ。

なになに・・・。

『from 朝川』

「どうしたんですか、優子さん？」

「ああ・・・せっかくの素敵な一日がああ・・・鬱だ・・・そう
だ、死んでやろう・・・」

「優子さん？何言ってるんですか？優子さ……ああ！？優子さんがベランダから飛び降りよ

「どうしている!？」

自殺しようとしたところを、リナにマジ顔で止められる私。

「私の素敵な一日をおおお！！日曜をおおお！！朝川あああ
！！」

「で、そのメール内容見たんですか？」

「……まだ」

「読んでみればいいじゃないですか」

「うん」

『ライアスとか言う悪魔の男の子が来たぞ。（背丈からして高校生ぐらい）』

「どうしたんですか優子さん!？」

「リナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ
ナリナリナ . . .」

「なんで急に私の名前を連呼するんですか!？」

「魔界帰還魔界帰還魔界帰還魔界帰還魔界帰還魔界帰還魔界帰還魔界
界帰還魔界　　．．．」

「うわぁ．．．もう誰にも止められないや．．．」

うそ．．．ライアスって．．．リナの兄貴．．．だよな．．．。

ていうことは、リナはもう魔界に帰らなきゃいけないの？

早すぎるよ．．．いくらなんでも！

そんなぁ．．．！

「あれ、優子さん？泣いてる？」

「ち、違うよ！これは鼻水よ！」

「目から鼻水！？」

「あ．．．？」

「どうしたんですか？」

「続きがあつた．．．」

『なんやら、一回会って話がしたいらしい。魔界がどうたらこうたらで……。しばらくここに住むらしいぜ。』

「どうしたんですか？優　・・・キャ!？」

「勘違いで良かった勘違いで良かった勘違いで良かった勘違いで良かった　・・・」

「なにを勘違いしたんですか!？」

「実はね・・・」

「へえ、お兄ちゃんもここに来たんだ」

「なんで嬉しそうな・・・？」

「え・・・えへへへ」

『シャカシャカ　・・・』

あれ？

「またメールだ・・・」

「またですか？」

「こんどは誰だろう・・・うお!？」

「もしかして・・・」

「うん、たぶんみんなの予想通り」

『from 朝川』

「はぁ・・・」

『というわけで、しばらく俺の家に兄妹移して、俺はお前のところで住むっていうのは

どうだ？ by カッチョ良すぎる 朝川』

・・・。

「ピッピッピッピ・・・ッピッピ」

『ジャカジャカ・・・』

お・・・？

誰だ？

優子か？

おお、あたり！

『R e : 死ね』

・・・・・・・・・・。

本文はもつと酷かった・・・。

『ジャカジャカ ・・・』

またメール・・・。

『じゃあ、今日1時に駅前の喫茶店な』。』

おお！？

よし、駅まで行くのなら・・・。

周りの女子に申し訳ないが、顔の露出は控えよう。

だって、俺の顔見て目がハートになってしまっても、俺が困るからな。

ははは、俺って罪な男だな。

「ライアス君・・・朝だぜ！・・・って、あれ？どこだ？」

「おお・・・この世界の人間は、起きるのが遅いんだな」

あれ、何でベランダにいるんだ？

「あ、そんなところにいたのか・・・って、お前、今飛んできただろっ」

「ああ、それが？」

「それが？じゃない！昨日あれだけ言っただろう！お前は、俺の認めたイケメンなんだから！

外に出るときは、このマスクを被れと！」

「うるせーな、他の家に行くぞ？」

「ああ！それだけは・・・！」

「じゃあ、俺の事に口出しするな」

「・・・はい」

悪魔がやってきた！〜22〜（後書き）

『悪魔がやってきた！』をいつも見ていただき、真にありがとうございます。

大変申し訳ないのです、今から2009年4月にかけて、不定期に作品投稿することになります。
ご了承ください。

突然ですみません。

こんな作者ですが、これからも楽しんで読んでください^^

悪魔がやってきた！〜23〜（前書き）

おまたせしました！！

23話目です！！

悪魔がやってきた！〜23〜

「で、なんで俺にこの仮面を被らせたんだ？本当に他の家に行くぞ？」

「バカ野郎！お前が他の家行くといっても、どちらにしろこの仮面はお前には必須アイテムだ

つたんだぞ！ 幸いお前は俺の家に来た・・・本当にお前は運がいんだぞ？

なのにそれをお前は・・・」

「あー、もうわかったよ。これ以上何も言っな」

「うるさい！最後まで聞け！！いいか？お前はとんでもないことをしたんだぞ？

魔界からこっちへ来る？うん、その心意気は良いんだ。しかし！しかしぞ！？お前は、何の装備なしでこっちに来ること！それがなんとも思わなかったのか！？ええ！？おいコラ！！

何で俺がこんなに怒ってるか、まだ理解していないようだな！？つまりだ！！

俺はイケメン、そしてお前もイケメン！！それくらいは知ってるはずだよな！？

当然魔界でもイケメンでモテていた君は、やっぱり肌の露出（特に顔）を避けるべきだ！！」

「（別にモテてなかったけど）」

注：ライアスは自分で気付いていないだけで、実はすごくモテていた！！ライアスは鈍感！？

「オイ聞ってるのか！？まとめるとだなあ、お前は、とんでもないバカ！！イケメンとしてなっていない！！とんでもないクズ野郎とということだアアア！！」

「・・・リユ・ルオカ・ナーセ・キユ・・・！」*悪魔がやつてきた！～11～参照

「え？何してんの！？何！？その掌の上にある球あ！？」

「安心しろ・・・気絶させるだけだ・・・」

「ちよっ、待て！ゴメン！謝る！！だから待ってえええ！！」

「次は撃つ」

「・・・はい」

それから黙って駅前の喫茶店に向かって二人は歩きだした。

「そのころ喫茶店では」

「優子さん、これ食べたいです！」

「ん？なにになに・・・」

『新登場！6人前！ウルトラスーパーデリシヤス マンゴーパフェ
！！税込2897円』

おいおい・・・なんだよこの量、名前そしてこの値段!!

6人前!? ウルトラ・・・なんでまた星がつくんだよおお!?
なんだ?

ここのマスターは、ウチのお父さんと昔からのフレンドか!?

ネームセンス無さすぎだ!!!

そして、『新登場』って、ここはファミレスか!?

学生時代にもファミレスでこんなと同じの見たぞ!?

「ねー優子さん、たーべーたーい」

うはう!!

リナが初めて私におねだりした・・・!!

ぐうう・・・惜しいぞ・・・2897円・・・!!

「おまたせしました」

買っちゃった・・・。

「わぁーい!! いただきます」

「どうぞ・・・」

はぁ・・・まあしょうがないか・・・。

どうせ残すだろうし・・・6人前はいくら体に似合わず、大食いのリナでも、ギャル曽根とか

じゃない限り無理だろう。

残したら、あいつらに食べさせるか・・・。

くそのころのあいつらは

「ちょっと君達、その署まで来てもらおう」

「・・・おい、なんだよ署って？おい、朝川」

「・・・」

「朝川？」

く20分後く

・・・！！！！

私は今ものすごく驚いている。

何故かって？

それは・・・キモイ仮面を被った二人が入ってきたから。

「あの・・・どちら様で？」

「俺達だよ！」

「あの～すいませ～ん！マスター！不審者で～す！」

マスター：「け、警察を呼べ～！」

店員：「そこの交番～！」

「ちょっと待って！そこの交番だけはあ～！」

「おい、またかよ・・・」

「ま、また君達か～！」

「ちょ、違っんです！！なあ、優子～！」

「ん？君はこの人の知り合いか？」

「いいえ、全く知らないキモイ人です」

「優子！？」

「来い!!」

「ああああああ．．．」

とまあ、こんなことではそんなに驚かない。

もっとも驚いたのは．．．。

リナが税込2897円のウルトラスーパーデリシャス マンゴーパ
フェ、6人前を．．

完食した。

「ふう．．．ご馳走様でした!」

最強．．．。

悪魔がやってきた！〜24〜

あれ？

警察が誰かをパトカーに乗せて、どっか行っちゃった……。

やりすぎちゃったかな？。

まあ、喫茶店^{「」}で待っていても、もう来ないだろうな……。

私達も帰ろうかな……。

「さ、帰ろうリナ」

「え？お兄ちゃんとまだ少ししか話してないよ？」

「いや、たぶん今日は無理だよ。うん、絶対」

その時。

『カランカラン！！』

と、喫茶店のドアがベルを鳴らして開いた。

そこには、ライアスがいた。

「あれ？ライアス？さっき連れて行けなかったっけ？」

「あんな乗り物から抜け出せないわけ無いだろ」

「ああ、またなんか変な能力？」

「いや、強行突破」

「へ！？」

「いやね、ちよつと朝川アイツといると、良いこと無さそうだったから…」

朝川：『待つてくれ！止まってくれ！車を止めろ！』

警官A：『無理だね』

警官B：『勝手に降りるなよ。まあ、手錠掛かってるから無理だろうけど』

ライアス：『俺は降りるぞ』

朝川：『は！？』

ライアス：『じゃあな、楽しかったぜ』

朝川：『待て！俺も！』

【ガチャ】

朝川：『ああ！危ない！』

【バサ！】

ライアス：『アディオス』

朝川：『裏切り者おお……！！』

「あれ？手錠は？」

「粉・砕」

「あー……って、どんだけ力あるんだ悪魔は！？」

「魔界の手錠は“モランダ”のパワーでも取れないぜ？」

「“モランダ”って？」

「聞いた話には、モランダはオランウータンの10000倍の握力らしい」

「はい！？」

「体形はゴリラだな。あと体長は3メートル」

「うわ、でっか……」

「って、今はそんな話はどうでもいい。リナ」

「なに？」

「最近出番少くないかお前？」

「？」

「あつと……間違えた。リナ話がある」

「なんですか？」

「俺達の親は離婚した」

「え……？」

「ちょ、それってどういうこと！？」

「まあ、正直言つと……リナが原因なんだ」

「リナが！？」

「私が……ですか？」

「もしかしたら、エルル区崩壊の恐れも……」

「それって、どうなるわけ？」

「……そもそも魔界は、約6000億年前に出来たもので、その当時は、魔界に4000と国があり、その国と国とが正面からぶつかり合い、結合し、手を組み、段々少なくて勢力を伸ばし、大きくなつていった……しかし、今の魔界の王、グラエリウオンが国王^{キング・オブ・サミット}会議を開き、国を全てまとめた。全てまとめた一つの国を魔界と名付けた。

ま、簡単に言うたくさんの国が区となったんだ。日本で言う東京だな。東京が魔界。

そしてグラエリウオンは界王となった。最初こそは、各区から反対の声があちこちから来た。

しかし、ヤツ特有の武力政治で、反対する区をことごとく潰した。そして、今の1界400区制となった。」

「ふむふむ……すごく長かったけど、エルル区崩壊したらどうなるわけ？」

「ああ……お前、約6000億年続いたものを、崩したらどうなると思う？」

「え？うん……？」

「フウ……簡単に言おう。じゃあ、長く続けたドミノ。これを例えにしよう。」

長いドミノの最後が倒れてしまったら、どうなる？」

「そりゃあ全部倒れ……はっ！！」

「わかったか？全区域崩壊、魔界崩壊だ」

「魔界崩壊すると、どうなるの？」

「続いたな……」

「長いですね……」

「ねえ、どうなるわけ？」

「悪魔の世界進出かな？あるいは、地球滅亡」

「えええええええ！？」

マスター：「すみません、お静かにしてください」

「あ、すいません！」

「ま、そうならなければ、お袋も無事なんだがな」

「お母さん？そっか、離婚したから……心配なのか」

「いや、そういうわけじゃ……」

「隠さなくたっていいって！あつたな、私にもそんな時代！」

「まあいい」

「お母さん無事かわからないの？」

「ああ……でも、牢獄からは抜け出すことが出来た」

「牢獄！？なにがあつたの？」

「ん？ま、いろいろな……」

「いろいろつてなんだよ……」

「ま、親は無事！俺達も無事！でも、今後どうなるか分からない！

「これが結論だ」

「最初っからそう言ってよ」

「ま、あれだ、地球も危ないかもな。だから、お前の家に住ましてもらっ。何かあった時のためにな。あ、もちろん風呂は銭湯に行くぜ？」

「え？何かいろいろ言われて、頭がグルグル回って……？」

「（こいつ……本当にバカだな……）」

「いっしょに住みたいんだって！」

「お……おお？……いいよ？」

「何だコイツ……」

「あれ？朝川はもういいの？」

「ああ……」

「ふーん……じゃ、いいや。行こうか……って、ん？」

あれ？

おかしいぞ？

クリームがこべり付いた大きいグラスたぐくさん……。

「リナ？」

「はい」

「計7000円以上？」

マスター：「はい」

うわぁ、ニッコニコしてるぅ……。

くっ！！

いつのまにこんなに食っていた……！！

7000円……！！

くそのころ朝川く

「違っつて……！！変質者じゃないって……！！」

「はいはい、詳しくは後で聞くからね」

くうう……俺の計画が崩れていくうう……！！

悪魔がやってきた！〜25〜

ライアスとリナと私。

一緒に住むことになりました。

私はコンビニへ夕飯の買い物。

でも、所持金は600円。

どうしよう……。

リナとライアスは銭湯に行った。

もしもの時のために、ライアスに鍵を持たせた。

って、ココまで真面目に解説したけど……。

いつまで待ってもライアスとリナが帰ってこない。

不安……いや、ライアスがいるから大丈夫だと思うけど……。

大丈夫かな……。

「よし……見に行くか」

ライアス、リナ搜索開始！！

まあ、私の予想だと、その辺でライアスカリナが発端で何か争っているか、何か買ってるか、

このどっちかな。

ん？

あれ……？

待てよ？

ん？

いや、待て待て待て待て……。

私、リナたちにお金渡したっけ！？

あああああ！？

ヤバイ……！！

「ノオオオ！！ちょっと、すみません！そこ通してくださいー！！！」

くそのころライアスく

番台のじいちゃん：「だから、お金がないと駄目だって！兄ちゃん

そんなくらい分かるだろ？」

「いや、そんなものは無い……が、2000ウォンならある」

番台のじいちゃん：「なんだい？それ？2000ウォンって？」

「魔界の金貨だ。ほら、見せてやろうか？」

番台のじいちゃん：「なんだい、ただの金箔張った札じゃねーか」

「いや、そんなペラペラじゃないし、厚いぞ」

見知らぬ鑑定士：「こ……これは！？」

番台のじいちゃん：「え？」

見知らぬ鑑定士：「おじいさん……こりゃ、本当の金の塊でっせ！」

番台のじいちゃん：「ええ！？」

「ああ、ウォンは全て金で作っているからな」

番台のじいちゃん：「お、おい兄ちゃん！これ、全部もらっていいのか！？」

「いや、10ウォンぐらいならいいが……」

番台のじいちゃん：「金の塊10枚……」

「じゃあな、良い湯だったぜ」

見知らぬ鑑定士：「あれ？ここって後払いだったんですか？」

番台のじいちゃん：「……………（ホクホク）」

見知らぬ鑑定士：「あー。顔がホクホクしてるよ……………」

↓そのころのリナ↓

「すみません私の兄がお金を持っているので今すぐには支払えませ
んのので少し待って下さい」

番台のばあちゃん：「あ、ああ……………あんたスゴクしっかりしてるね
え……………まだ小さいのに」

そのとき、ライアスが女風呂進入。

「おい、リナ帰るぞ」

着替え中の女性たち：「……………！！！」

「あ……………」

女性A：「キャー！覗きよー！！！」

女性B：「帰れー！！！」

女性C：「きゃー！変態！」

女性D：「キヤー！良い男！！」

女性E：「警察呼んで！！」

「り、リナ！！ウォン払え！！ウォン！！」

「持ってません！！」

「ほら！これ使え！」

「はい。すみません、これで足りるかどうか……」

番台のばあちゃん：「なんだいこれ？いらないよ！」

番台のじいちゃん：「おい、待て！ちょっと話を聞け！」

女性A：「キヤー！！」

「リナ！行くぞ！」

「え、あ、はい」

「そのころ優子さんは」

はあ、はあ。

着いた……。

中にいるのか？

あ、ちょうどライアスとリナが銭湯から出てきた！

「リナ！ライアス！あれ？何で出てこれたの？」

「ウォン払った」

「ウォン？」

「簡単に言つと、金」

「金！？」

「この世界では、あまり取れないらしいな」

「ちょ、ちょっとちょうだい！」

「無理」

「です」

そんなあ……。

……よし。

「くれないと住ませないよ」

「……お前も朝川と同レベルだな」

「な！？朝川！？……わかった！さっきの取り消し！！！」

あんなヤツと一緒にじゃ、困るー！

「（あー、こいつら似てるな……）」

悪魔がやってきたー！26ー（前書き）

ちょっと文章変化がコロコロから出てきます。

悪魔がやってきた！〜26〜

爽やかな朝。

天気は快晴。

マンションから見える、綺麗な太陽。

そのマンションのベランダに優子とリナは立っている。

「良い朝だ……」

と、優子が言い……

「気持ち良いです……」

と、リナが言い……

「おい、朝飯はどうしたんだ？」

と、ライアスが言った。

おい、爽やかな朝ぶっ壊しだよライアス。

優子はライアスに怒りの感情を言葉にして出した。

「うるさい！私とリナは今気持ちの良い朝を満喫中だ！！」

「気持ち良い朝なんて、珍しいことでもないだろ。それより飯だ」

偉そうに……。

優子はため息をつき、そう思った。

「私達の朝ごはんは……はい、リナ！」

優子がリナに問い……

「ジャンケンで負けた人が買いに行く!!」

リナが答え……

「は？」

ライアスが驚いた。

「そういう決まりなんだ。仕方が無かるう」

「待てよ！無理だ！俺はこっち来たばっかだぞ!？」

ライアスが少し困る。

何か……困った顔、リナに似てる。

そう思った優子は。

「ははは、ジョーダンだよ。今日だけ特別だよ」

「え？なんですか？」

「出前か？」

「昨日の夕飯の残り」

「……」

ライアスが優子を睨む。

「私、今日仕事だから」

「いや、だから？」

不快そうな顔でライアスが言い返した。

「だから夕飯の残り」

「酷え……」

「まあ、ほとんど毎日こんなですからね」

「ええ！？」

「じゃあ、行ってきます」

「いつてらっしゃい！優子さん！」

「なんでこんなところに……ブツブツ」

うふふ。

なんだかんだ言って、ライアスはまだ子どもだね。

と思いながら会社へ出勤中の優子。

いろいろ考えている内に、会社に着いた。

さ、今日も一日ビシッと行こう！

「おはようございます！」

「おお、オハヨーツす」

「市村ー！」

小島さんと仲間達が話しかけてきた。

「え、なんですか？」

「ちょっと、折り入って頼みがあるんだが……」

「頼みって？」

「いや、あのな……うちの会社でやってる、ビーチバレーで、選手おあこりの鳳が故障しちゃって、メンバー足りないんだわ。大会も近いし……。だから、ちょっと手伝ってもらえないかな？」

「……は！？ 私！？ ちょ、何で女の私が！？」

「いや、だって背も大きいし、運動神経あるし……」

「だからって……」

小島さんたちが、ザッと頭を下げた。

「頼む!!手伝ってくれ!!」

「あ、いや、やめて下さい!頭上げ……ちょ、小島さ……頭……上げろおお!!」

優子はキレた。

「すみません……」

「いや、こっちは入ってくればそれでいいんだけど……」

「まだ痛みますか?」

「いや、そこまでじゃ……」

さつき優子は、言っても聞かない小島さんの胸倉を掴み上げた。

「ふう……」

優子は小さくため息をついた。

「分かりました……」

「え！？ 本当か！？」

「でも、出場するのは私じゃないですよ」

「は？」

「１７歳の男の子」

「え！？」

「年齢制限とかは無いですね？」

「え、まあ……大会って言っても、お遊びだし……大丈夫だと思うけど」

「よし決まり！！」

そして優子はスキップしながら自分の仕事場へと戻った。

仕事を終わらせ、すぐに家に直帰する優子。

「ただいま！」

「あー、おかえりなさい」

「ライアス！」

「あ？」

「おまえに、ちょっと仕事がある」

「は？仕事？」

「まあまあ、来週を楽しみに待ってる」

優子はニヤニヤしながら夕食を食べ始めた。

「なんだよ…仕事って……」

ライアスは不安を抱いた。

悪魔がやってきた！〜27〜

〜ビーチバレー大会・当日〜

今日は快晴、気温35°。

暑い日の光が、海に反射して、また一段と眩しい。

そんな中、今日は千葉　ビーチで、ビーチバレー大会！

「さあ、ライアス！受付行つて！」

「お前、仕事って言ったよな？」

「……さ、一稼ぎ一稼ぎ！」

「誤魔化すな！」

「まあ、優勝したら小島さんが奢ってくれるらしいから！ね？お願いい！」

「何で俺が……」

「大丈夫！！お願いだから、やって！」

「……仕方ない……その代わり、俺達にこの世界の金をくれ」

「いいけど？なんか買いたいなの？」

「いや、そろそろウオンが無くなってきてな……」

「ああ、そう。ま、とりあえず、そこにみんないるから、挨拶ぐらいしたら？」

「ああ」

ライアスは小島さんたちのところに行った。

「お？君がライアスか？」

「ああ、今日はよろしく」

「こちらこそ！いや、それにしてもいい体だなあ。服の上からでも分かるぞ」

「そんなに良い体じゃない」

「ま、今日は頼んだぜ、ライアス！」

「ああ……えーと……」

「ああ、俺が小島だ」

「吉田です、よろしく」

「鵜久森だ。よろしくな」

「飯島だ。頼んだぜ」

「よろしく」

ライアスたちは、この短時間で、みんな仲良くなっていた。

「ちょっと待った！！ライアスウウウ！！」

誰かがライアスに向かって叫んだ。

聞き覚えのある声だな……まさか、この声は！！

優子だけではなく、ライアスもそう思った。

あ……あ……朝……。

「朝川か？よう、久しぶり！」

「久しぶりじゃない！！この野郎！！くそ！お前のせいで、俺の美顔に嫉妬した警官につかまっちまったじゃねーか！！」

まゝた変な事言い出したよ、このド変体。

「お前も出るのか？」

「当たり前だ！！」

「マスクはいいのか？」

「……ああ！？忘れた！！」

「まあ、その方が、うちの会社にとってはいいんだがな……」

「なんだとう！？吉田！！」

「まあまあ、落ち着けて」

「さ、そろそろ試合だ。受け付け終わるぞ、早くライアス行って来い！」

「お？ああ」

そして、大会は始まった。

『さあ、始まったビーチバレー大会！！今年で2回目！！さあ、今年はこのチームが勝つのか！』

2回目って、歴史薄！！

『出場するチームは、会社と、去年優勝の、ナポレオンズ！そして、平均年齢が17歳の若手チーム、ファイターズ、会社！この4チームです！』

「へえ、4チームしか出ないんだ！」

「ああ、まだ2回目だからな」

「それにしても、あのナポレオンズって、あれ体格的に、この道の人だよな？」

「ああ、全国大会の千葉代表だ」

「負けたな……」

「なんか言ったか？」

「いえ」

『さあ、初戦は 会社と、ナポレオンズ!!』

いきなり!?

「望むところだ……!!」

「うし! いつちよやったるか!!」

うわお、みんなやる気満々!

『尚、この大会はリーグ制。そして、チームで二人ずつ出し合い、三回試合をし、多く勝ったチームの勝利。説明は以上です』

「じゃあ、初戦の先鋒は、俺と鵜久森さんが行く」

「じゃ、次は俺と飯島だ」

「じゃあ、お前ら最後な」

「は!?!」

「大將かよ!!」

「ま、いいだろ！」

「ちよちよいと終わらしてくるよ！」

「大丈夫かなあ……あの人たち」

「あの人たちなら大丈夫だよ」

「飯島さん！」

「ま、見てれば分かるよ」

【ドシュ！！】

「鵜久森さん！！」

「OK！」

【ビシ！！】

「ナイス！鵜久森さん！」

【ポーン】

「いけ！」

「うるあー！」

【ドシュ！！】

す……すごい上手……。

「あの人たちは、もともと全国大会の千葉代表だったんだよ」

「えええ！？知らなかった！！」

「な、すごいだろ？」

そうこう離している間に、小島さんたちは、パーフェクトゲームで試合を終えた。

「OK！いつも通りの入り方！」

「楽勝だ！いけるぞ！」

「ハハ、甘く見ないほうがいいぜ、吉田」

「俺達も勝つぞぉ！！」

見たところ、吉田さんは筋肉質で、飯島さんも背が高い……この二人も、いいところまでいけるだろう……。

優子だけではなく、観客もそう思った。

だが、10分後……。

「ゴメ……」

「気にすんなよ！次だ次！！」

「うん……」

『さあ、最後の組！一体どちらが勝つか！！』

「さあ、行こうぜ朝川！」

「足引っ張るなよ！」

「こっちのセリフだ」

そう言っていると、ライアスは服を脱いだ。

うわぁ……すごい体！！

「うつ……俺だつて！！」

朝川も服を脱いだ。

……いたって普通だぁ……。

審判：「はい、じゃ、礼！！」

「お願いします」

『会社ボールから始まりです』

「行け！朝川！！」

「よっこい……セツとオ!!」

朝川のボールは、ものすごい速さだった。

おおお!?

これは……朝川いいかも!?

悪魔がやってきた！〜28〜

朝川の打ったボールは、ものすごい速さで場外に飛んでいった。

あゝあ、やっぱり朝川だあ……。

「おい！何してくれてんだ朝川！！」

「いやあ、すまない。次こそ入れるよ」

「あんまり期待はしていないよ……」

その後、ライアスがポイントを取り、サーブ権が移った。

ライアスは朝川にサーブを任せた。

ある条件を付けて。

その条件とは……。

- ・次入らなかつたら、サーブは打つな。
- ・そして、スパイクも打つな。
- ・レシーブやトスだけを仕事としろ。

この条件をすんなり朝川は受け入れた。

そして、朝川のサーブ。

「うゝオルア！！」

【ドシュッ！】

これまた、ものすごいスピードだ。

しかも、今度はライン際。

おお？

いったか！？

【ドシャ！】

「アウト！」

『あゝっと！朝川！またしてもアウトだあ！』

はい、朝川もう出番無しかな。

「ちょっと待て！今のは入ってるだろ！！」

と、朝川は審判に抗議した。

「うん、でも空気を読んでみました」

「読むなよ！何してんだよ！お前バカだろ！ちょ、おま……マジかよ！！おいゝ！！」

朝川かなり取り乱す。

「まあ、朝川よ。後は頼んだぜ」

「うるせえ!!」

すると、ライアスは次々とサーブエース、スパイクを決め、朝川も必死でボールに追いついた。

「なんだよあのパワー……あれプロ以上に速いじゃねーか……」

だれもがそう思った。

そして、マッチポイント。

しかし、ここで相手は作戦を練り、決行した。

ライアスに向かってスパイクを打ったのだ。

当然ライアスは反射で上げようとした。

「行くぞ朝川!!」

「おう!!」

「レシーブ!!」

【ドギョーン!!】

ボールは空高く上がった。

「.....」

会場に沈黙が続いた。

あゝあ..... やっちゃった。

それから、10分経つが、落ちて来ない。

「なにしてんだライアス!!」

「まあまあ、そのうち落ちてくるから、そのときは頼んだぞ」

15分後。

『あつと? やつと落ちてきました!! ボールです!!』

「朝川!!」

「OK!」

しかし、ボールは燃えていた。

「え!?! ちょ、待って! おい、速い速い速い!! ていうか、燃えて

……」

【ズドオン!!】

と、鈍く大きい音がした。

朝川の顔面に、大気圏から落ちてきたバレーボールが直撃した。

「ぶはあ!」

「ナイストース!!」

そう言うと、ライアスは高くジャンプした。

そのまま羽をはたかせ……。

あ、ヤバイ。

【ビシィ!】

【ズドオオン!!】

『やった!ライアス決めた!!』

ああ……ライアスが空飛んでるよ……。

どうしよう……。

「ね、ねえ……あの人……」

ああ。

終わりが……。

「うん、なんか力強くない？」

違うだろ！？

突っ込むところ違うだろ！？

飛んでるんだよ！？

普通じゃありえないことが起こってるんだよ！？

なんでそんな平然としてられるの！？

「違うよ！！あの人さあ……」

お？

今度こそちゃんとつつこんで……。

「なんかカツコ良くない？」

オイイイイ！！

まだ違うううう！！

飛んでる！！

あの人と・ん・で・る！！

「ね、ねえ、あの人……」

頼むぞ少女！！

「死んでない？」

朝川アアア！？

そうだ、そうだった！！

うわ、血を吐いている！！

朝川は鼻から大量の血を流していた。

その後、朝川は救急車で運ばれた。

ま、まあとりあえず！！

初戦！勝利！！

「やりましたね！！」

「おにいちゃんカッコ良かったです！！」

「ハハ、そうか？」

「でも、どうする？」

「え？なにがですか？」

「次のライアスとのペア」

「あ！」

そうだった……。

その時。

一人の男が現れた。

お……お前は！？

悪魔がやってきた！〜29〜

お前は……！！

「服部！！」

そこにいたのは、最近出番の少なかった、服部たちだった。

「みんなも一緒ですよ」

「おお、瑠璃！真央！それに、国分くん、木村さん！と、木村さんの奥さん！？あと、他の部署のみんな！！応援に来てくれたんだ！」

「先輩！！瑠璃先輩と一緒に応援しましょう！！」

「うん！」

「市村さん、頑張ってください！」

「任せなさい」

「一回戦突破したんだって？なかなか強いじゃないか！去年の優勝チームを倒して、良い調子じゃないか！去年の準優勝チームの力、存分に発揮してくれたまえよ！」

「木村さん！？去年うちの会社って、準優勝だったんですか！？」

「そうよ。去年は主人が出場してね、それで負けたのよ！おほほ……」

「あ、こんにちは！木村さんの奥さんですか？」

「おほほ、聞いているわよ。あなた、市村さんでしょう？」

「あ、はい」

「おほほ、元気でいいわねえ……本当に……」

「はあ？」

「小島たち！頑張れ！！」

「おお！」

その時、見知らぬ男が現れた。

「すみません、あなた、ちょっといいですか？」

「え？俺？」

呼ばれたのは、ライアスだった。

「すまないね、いきなり」

「いや、構わないが……」

「それでだね。君……ライアス君に、うちのチームに入って欲しいんだが……」

……え？

「……え？」

「ああ、申し遅れた。私は、プロバレーチームの千葉××のスカウトの、山井^{やまいだいすけ}大介だ。君をプロに誘いに来た」

「おい、マジかよ!!」

「ライアスが……プロ!？」

周りにいた、観客もざわついた。

「俺がですか？」

「是非、入って欲しい!」

ライアス……。

「おにいちゃん……」

「すみません。俺は、人間じゃないので。入りたいけど、入れません」

そうだったああ!!

その手があつたかああ!!

「人間じゃない!?!何を言ってるんだ!?!」

「あぁと……まあ、見たでしょ、あんたも。俺はこの翼で飛べ
し、魔力も使えるんだ。こんな俺を使ったら、どうなるか分かるだ
ろっ?」

「いや、そんな……」

「とにかく俺は、悪魔だ。人間じゃない。人を殺す悪魔だ。だから、
すまないがお引取り願う」

「……………」

山井はトボトボ帰っていった。

「コノヤロー! カッコよかったぞ! ライアス!」

私は、ライアスの頭をガシガシ撫でてやった。

「バツ、やめろ! 離せ!」

「いやあ、クールだねえ」

本当……これが朝川だったら……う!

「ライアス君……」

服部がライアスに話し掛けた。

「ん?」

「僕は服部って言う。朝川さんの代わりに、僕が君とペアを組むこ

とになるけれど、良いかい？」

「ああ、構わないぜ」

おお……クールボーイ二人組……！！」

これは意外といけるかも！！

さて、去年の優勝チームをいきなり倒したから、波に乗れるかな？

悪魔がやってきた！〜30〜

『次は、平均年齢17歳の、ファイターズ対 会社！！優勝候補のナポレオンズに勝った 会社に挑む、平均年齢17歳のファイターズは、若さだけでなく、力も十分です！平均身長は、194センチ！そして、エースの木晴^{きはらし} 幽^{ゆう}は24歳でキャプテン、ちなみにチームの最年長！身長212センチ、体重105キロ、MAX169キロのスパイク！！それなのに、プロのどこからも、呼ばれていない！！この大会を見に来た、プロのスカウトが、目を光らせております！もはや、この黒船に敵は無し！！という感じでしょうか！ええ！実際、 会社に初戦勝利しています！』

「確かに、みんなでかいな……」

「ああ……でも、まだあいつらは若い！負けてたまるか！」

ふーん……確かに、相手の人たち、高校生や大学生にしては、でかいし強そうだけど……エースの木晴^{きはらし}って、どこかで聞いたような……？

『では、両チーム先鋒の2人は、前に！』

「小島ー！！鵜久森ー！！先手必勝だー！！」

「頼んだぞー！！」

小島と鵜久森は、観衆に振り向かずに、コートへと歩いていった。

力……カッコ良すぎだよ！！二人とも！！

相手は、ひとりはゴツイ大きい選手で、ひとりは細く縦に長い選手だった。

これは意外と強そうだな。

「ピーッ！」笛が鳴った。

【ドシュ！】

痛烈な小島のサーブがライン際に迫る！

ギリギリだが、入ってる！

ボールが地面につきそうになった。

観衆のみんなは、入ったと思い歓声を上げた。

しかし、次の瞬間思わぬことが起きた。

つい今までそこにはいなかったはずの、細い選手が飛び込んで、ボールをあげていた。

「な…何い！？」

「うそだろ！！？」

タイミング良く、大きい男がジャンプした。

「くるぞ！2（ツー）アタック！！」

「おお！」

小島は2アタックと予想した。

鵜久森もすぐに2アタックだと感じた。

体の大きさ、鍛え抜かれた体。

あの、細い男にスパイクを打たせるとは思えない。

私もそう思った。

しかし、そのでかい男は、バックパスをした。

「何！？」

「ちっ！」

高いパスだった。

細い男は、後ろから勢い良くジャンプしてきた。

「来るか！？」

時間が止まったように、会場が静まった。

【スッ……】

細い男は、すでに着地していた。

【ズドン！】

ボールは砂浜に深く埋まった。

「は……？」

『ピーッ！』

『おーっとー！一体何があつたんだ！？今、一瞬の出来事！！
会社は一步も動けずー！！これに、会場は大騒ぎー！！』

「な…なんだあの細いやつは……！！」

会場の観客は、全員度肝を抜かれた。

悪魔がやってきた！〜31〜

「な、なんだあの細男は……！！？」

鵜久森さんも小島さんも驚愕している。

そうすると、ゴツイ男が話しかけてきた。

「ぐはは……すまないな、人間諸君」

「人間諸君？」

小島が聞き返すと、「おつとすまない」と、細い男が言った。

「私とこの大男だけは、人間の皮をかぶった悪魔なんだ」

小島と鵜久森は、「何！？」と驚いた。

すると、細い男が言った。

「すまないが、このことは内緒だよ。チームの人間にも言っていないだ。もし、ばらしたら私たちは容赦はしない」

そういうと、小島と鵜久森は寒気を感じた。

「私は、バキューヴァという」

「俺はバンフクーだ」

そういった後、二人は自分の位置に戻った。

小島たちも戻った。

が、二人は恐怖で体が動かなかった。

その後、あれよあれよと点を入れられ、

「ピーー！！終了！！」

エースの小島と鵜久森は負けてしまった。

「う……嘘だろ！？」

「小島さんたちが……負けた！？」

小島は、ちよいちよいと優子とリナを呼んだ。

なんだろう…？

「どうしたんですかぁ？」

「すまない、市村。このことは俺たちだけの秘密だ」

「え？なんですか？」

「あいつら二人も、リナと同じ悪魔なんだ」

え！？

「うそ！？だって、もうリナのこととは……」

優子がそういうと、後ろからライアスが聞いた。

「名前は？」

「うわ！ライアス！！いたの！？」

「名前は…バキューヴァとバンクフーとってたかな」

それを聞いたライアスは、驚いた。

「バキュとバンが！？あいつらなにしにきてんだ！？？」

「え？どうしたの！？」

「その二人は、俺らのお袋の護衛役人なんだ。二人ともかなりの実力者で……」

小島は聞き返した。

「でも、そんな奴が何故ここに？俺容赦しないとかわれたけど、意味あるのかな？」

「わからん……だが、試合が終わるまでまとう」

「……うん」

『さて、次は？ドンドン行こう！もしかしたら、次で優勝が決まる

のか!?!」

「吉田!飯島!!頼むぞ!!」

すると、相手も出てきた。

「うし!」

「やるか!」

吉田さんは、肩に力が入っていた。

すると、飯島が言った。

「肩の力抜いて、落ち着いて、吉田なら出来るぞ」

「飯島……よし」

その後、熱戦が繰り広げられた。

吉田さんは、必死でボールに喰いつき、飯島さんは威圧感がすごかった。

熱戦の末、勝者が決まった。

『勝者! チームの二人!』

「おおっし!!」

「やった!!」

ついに、勝っても負けても最後の試合。

ライアス・服部 対 木晴・大曇おおぐもり

優子が勝ちを願っていると、木晴が走ってきた。

「市村先輩!!」

優子は驚いてしばらく見ていたが、はっとひらめいたように、

「あ、木晴くん!!?」

「そっすよ!!」

「あ、あ、久しぶり!!元気だった?」

「おかげさまで」

「ね、優子。だれ?カレシ?」

「うっん、高校のときの後輩」

「へへ、そうなんですよ」

「こいつさ、剣道部入ったとき、すごいチャラチャラしててさ、でも中学で全ての大会優勝とかの奴だったのよ。んで、私が喝入れて

やろうと思ったら、こいつ女の言うことなんて聞くかよ、とか言っ
たんだ。んで、私切れて、フルボッコにしたのよ。その後改心した
ってわけ！」

「はは、あの時はどうも」

「でも、今はなんでこんなところで？」

「いや、大学で、誘われて……」

「ふーん、がんばってね！」

「容赦しませんよ！」

そういうと、木晴は去っていった。

そのコロ、ライアスと服部は、静かに戦闘態勢。

そして、最後の試合が始まった。

悪魔がやってきたー！31ー（後書き）

すみません、この場この時にいう事ではないので恐縮ですが、・・・
自分でも薄々気づいてます。

自己満足の作品と言われても仕方ない作品なので、なんの捻りも無
くつまらないと思います、申し訳ないです。

そして、ネタがつきそうです。

ココまで見てくださった方々、あと少しの辛抱です^^；
どうか、もう少しだけ見守ってください。

悪魔がやってきた！〜最終章〜 『さようなら。リナ・・・』 (前書き)

本当にいままでありがとうございました。

悪魔がやってきた！〜最終章〜 『さようなら。リナ・・・』

「いくぞ！！ライアス！！」

服部が喝を入れる。

「おお！！」

ライアスが気合を入れる。

「いけーライアス！！」

「お兄ちゃん！！」

「いけえ！！」

「頼んだぞ！！」

「やっちまえ！！」

「ライアス！！服部！！」

「イケエエ！！」

「うおおおお！！」

優子さんが、リナが小島さんが鵜久森さんが、それに吉田さんに飯島さんに木村さんが声をかけた。

みんな……みんな一つになった。

うれしい……すごいうれしいよ。

優子さんうれしすぎて……ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

「おらあああ！！ラアアアイアスウウ！！はあああつとりい
いいい！！！！お前ら負けたら我の超暗黒物質並みのパンチ食らわす
ぞおおお！！クラアアアアアアア！！」

皆のもの！！

よくみとけええええ！！！！

久しぶりの優子さんのハジケだアアアアアア！！

最後の雄叫びじゃアアアアアアアアアアアア！！！！

「うわ！！優子さんすごいですう！！」

「優子お！！見てろ！！」

え？

あれ？

今……服部……私のことを……。

そんなこと関係ない。私は彼らを応援する。

グッ・・・。

「龍！！がんばれ！！ライアスも！！勝ってきたな！！」

「おおおお！！」

「おお！！」

「さすが市村先輩だ・・・最高の試合だなあ・・・なあ、大曇よ」

「ああ」

いつのまにか会場には。3千を超える人がきていた。

「いざ！！勝負！！」

会場はたった15分の間、ものすごい熱気に包まれた。

たった15分・・・私には、1時間にも2時間にも感じられたなあ・・・。

悪魔がやってきた！！最終章　『さようなら。リナ・・・』

夏の太陽。

もうなんかすっごく私にグッサグッサ刺さってくるよ。

紫外線が。

ものの数分前までここはものすごい熱気に包まれていた。

「おゝい！優子！！早くしろ！」

服部・・・うん今行く。

本当は、服部は私とタメ口で話したかったんだよね。

できなかったんだね。

「うゝい！今行く！！」

私は、フツと空を見てみた。

ゝ数分前ゝ

勝利の興奮冷め止まぬベンチをさておき、私たちは、ビーチの片隅にいた。

「え！？お袋が！？」

「ええ。レモフラグウイルスに感染していると診断されました」

「なにとぞ、時間の問題なので、なにとぞ！！お二人に戻ってもらいたくて・・・」

「まで！！レモフラグウイルスって・・・おふくろは後どのくらいなんだ！？」

「それはわかりません」

「ちょ、ちょっと待って！！」

リナが珍しく声を荒げた。

「はい？」

「リナ？」

「私たちが帰ったら・・・もう優子さんには会えないよ！？」

え？

「リナ！どうしてそのことを！？」

「私・・・そんな本を読んだことがあるの」

「そうです・・・魔界憲法433条、1度界外に出たものは、私事ではもう出ることは出来ない」

「リナ！お袋・・・俺たちのお母さんと、今どっちが大切なんだ！考えてみる！！リナ！」

「どっちもだよ」

リナはまっすぐな眼で見た。

「でも・・・ごめんね優子さん」

振り向いたリナに、驚いた。

「私・・・ママを捨てられないや」

リナ・・・！！！！

そういうと、リナはライアスたちが用意した、異次元世界の入り口の前に立った。

「リナ・・・こんなショボイ別れ方だけど、最後に言わせて」

「・・・うん」

「作者 憎い」

「え？」

「あ、間違えた．．．．リナ．．．いままでありがとう。いろいろあったよね。いままで本当に楽しかった。できればずっと一緒に良かった。最初は、とんだ子悪魔だと思ってた。でも、自分に妹が出来たみたいで．．．本当にうれしくて．．．．リナ、本当に最後だよ．．．優子さんもう．．．もう．．．．．リナ、じゃ．．．じゃあねリナア！！楽しかった！」

「優子さん．．．！！」

「本当に．．．．たっ楽しかった！！元気でね！！」

「優子さん！！私も最後に！！」

「えっ？」

「優子さん！！今朝から、ジーパンのチャック開いてる！！勝負パンツ丸見え！！」

「え！？あ！！テメ、リナアア！！コラアア！！最後の最後にテメエ！！しかも勝負パンツって事なんで知ってたあああああ！！！？！？」

ブウン……。

「．．．．バイバイだね」

今までいろんな事あったな。

この青空の下。

私は心の中で思った。

ああ、これでまたつまらない人生に逆戻りだ。

どうするよ、私・・・ああ、みんなが怖い・・・。

でも・・・でも最後に言わせて。

・・・さっきから最後までいってるけど、本当に最後。

「リナ・・・また・・・ね」

「あれ？待って、俺は？（ナルシストの朝川）」

悪魔がやってきた！〜最終章〜 『さようなら。リナ・・・』（後書き）

長い間見守っていただき、真にありがとうございました！

僕は、自己満足で書いていましたこの作品（爆）

途中でゴタゴタもありましたが、ここまでこれたのは、皆さんのおかげです！！

ほんとうにありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6562d/>

悪魔がやってきた！

2010年10月21日21時31分発行